

有田の陶磁史 (126)

春分の日を挟んだので一週お休みでしたが、今回は、天狗谷調査団は地元のプレッシャーを掛けられ大ピンチです。さて、どうなるんでしょうか？でも、おっとどっこい。三次調査はそれどころではありませんでした。

「李參平の窯跡の発掘調査」という地元の空気に押され気味の調査団でしたが、三次調査は、最初に発見されたA窯の全容を解明すべく、A窯の上方の焼成室の探査からはじまりました。ところが、昭和42（1967）年7月5日に事前協議を行い、翌6日から掘り始めたこの調査は、何とわずか8日間で13日にはやむなく終了となったのです。

何が起こったんでしょうか？

台風が迫っている影響で、6日の調査当初から雨続きでした。9日にはいっそう雨が激しくなったため、現地調査は諦め、公民館に設けた作業室で写真撮影をしたといいます。倉田氏はこの時の状況について、次のように記します。

「昼食を了えた十二時三〇分から一時にかけ、沛然たる豪雨が訪れた。この豪雨の結果、有田町全体の山地で山崩れが起こり、サイレンが鳴りわたった。一時半ごろ、山沢館長（註：公民館長）のご自宅も山崩れの被害を受けた、との情報が入り、学生全員が救援に走った。泉山の陶石場に近い山沢館長宅までの町のメインストリートは濁流が渦巻いて、消防車もなにも動けない状態だった。陶石の山をはじめとする山峡の細い沢底の道の両側に家並ができてできあがっている有田の町は、集中豪雨ともなると、町を縦貫する唯一の主要道路は川底と化すのである。山沢家の隣家も同じ被害に遇って死者が出た。豪雨の去ったあと、町内での死者は一〇名内外、負傷者、山沢館長夫人、愛嬢を含めて一五名以上、家の倒壊一〇〇戸以上ということだった。」

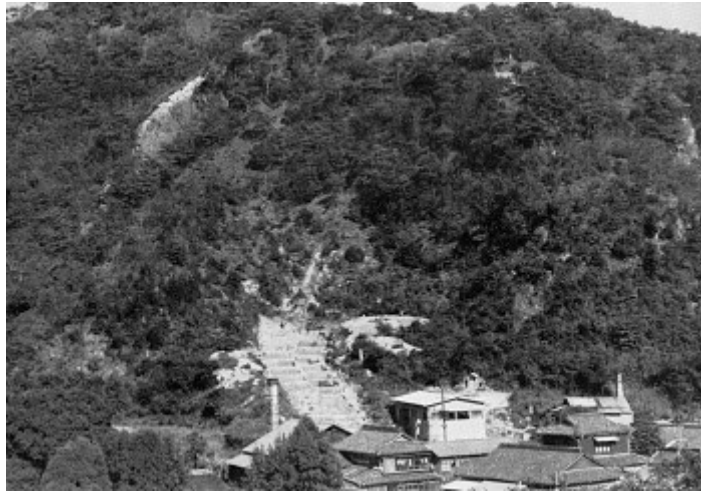
何と発掘調査の真っ最中に、今でも有田では「42水」の名で語り継がれている、大惨事が起こってしまったのです。

この年は、今では珍しくもなくなりましたが、異常気象が続いた年でした。年明けには寒波が押し寄せ、春先には高温で雨が多いかと思えば、5月からの異常渇水、梅雨は6月末から7月上旬と短かったものの、そこで台風7号が発生し8日には沖縄県付近で熱帯低気圧、9日には五島列島付近で温帯低気圧に変わったものの、その影響で豪雨となったものです。

倉田氏の回想中にもありますが、正式には有田の被害は、死者9人、負傷者37人、家屋全壊33戸、家屋半壊45戸だったそうです。ちなみに、その前には昭和23（1948）年9月にも有田川が増水し、大災害となっています。

有田川は、泉山をはじめ、有田各地の小河川から集まった水が、北方向に流れて伊万里湾へと注いでいます。特に天狗谷窯跡も位置する内山と称される川の上流付近は水源に近いため川幅が狭く、現在では氾濫対策が取られていますが、大雨が降ると、みるみるうちに水かさが増してまいります。そして、もし水あふれてしまうと、何しろ谷底にできてる町ですから、倉田氏が述べられるように、町を縦貫する県道自体が川に変わってしまうのです。

さあ、大変なことになりました。この後、調査はどうなるんでしょうね。（村）R2.3.27



発掘調査当時の天狗谷窯跡遠景（西から）（発掘調査報告書より）

有田の陶磁史（127）

前回は、昭和 42（1967）年 7 月 5 日からの三次調査で A 窯の調査をはじめたら、豪雨で有田が大水害となり、調査どころではなくなったところでした。倉田氏の記述を続けます。

「翌十日、晴れわたった空を、今回、はじめて仰ぐことができた。窯址に立ってみると、窯址の北西、白川の対岸の傾斜面に作られていた一町歩ほどの平坦な段畠が、そっくり、石の山からずり落ちて、地形を変えてしまい、岩肌を露出させていることに驚いて見入った。その下に数件の家が埋もれ、何人かの犠牲者が出たことも聞いた。A 窯の胴木間も B 窯の胴木間も谷から落ちた泥で、まったく埋まった。窯壁も、各所で崩れていた。雨の水路が砂床を深く剥ぐっていた。われわれは、往時の天狗谷窯址の壊滅の一因をみる思いであった。また B 窯上段の複雑な現状も、いくたびかの洪水で、谷の姿自体が、かなり変えられ、流されているためなのではないかと考えさせられた。いっぽう、この小さな沢に、なん回も窯が築き直されたのも、この町の中では、長い窯を構築することができる場所は、かなり限られていたからではないかとも思えた。」

天狗谷窯跡の惨状はよく伝わってきますが、地理や地形をご存じでない方には、内容的にちょっと分かりにくいかもしれません。窯跡対岸のずり落ちた段畑の場所とは、添付の写真のあたりです。黒髪山系に連なる有田の東半部の丘陵は、流紋岩質の岩山で、そこに腐葉土が乗っかかっているだけなので、今でもたまに大雨の時などは、その岩山から土砂が崩れ落ちたりします。次に、B 窯上段の複雑な現状とは、このシリーズの 3 月 6 日付け No. 124 で天狗谷窯跡の実測図を見ていただくと分かりますが、B 窯の上方の窯尻付近は、C 窯や所属不明の X 窯など、遺存状態の悪い焼成室が複雑にからまっている状況のことです。また、最後の方で、この窯場の場所を「小さな沢」と表現されているのは、天狗谷窯跡は、南北を丘陵に挟まれた谷状の場所に築かれており、窯体のさらに北側が谷底に当たります。通常は、この谷底側に物原があるのですが、窯体上部の方がこの谷底からやや離れているためか、物原は逆に反対側の南側にあり、窯体よりも高い場所に位置しています。

再び、調査の続きに戻りますが、発掘調査を再開しようにも、調査に従事されていた磁石場の人夫さん達も、災害の救援でそれどころではなかったと記されています。まだ、町の中は町民による救援隊と自衛隊が走り回っていたともいいます。また、当然ながら調査の中止は決定したものの、自動車も動いておらず、帰京するにも帰れない状況でした。これについて、倉田氏は、次のように記します。

「そこで、人夫さんたちの協力なしに、学生たちだけで、汽車が動き始めるまで、一日でも二日でも調査をすることにした。物資を運ぶヘリコプターの響きと、自衛隊の土木工事、救援隊の忙しそうな動きを高い山の遺跡から見下ろしながら行う調査は、後ろめたさが先に立って、気分の良い調査ではなかった。しかし、ただ宿舎で、汽車の動くのをまっているわけにもゆかなかった。」

この時には、D窯の調査が行われています。そして、倉田氏は「七月一三日、晴れわたった空、一見発掘日和の中で、われわれは有田の地を離れた。駅頭に立っても、サイレンはまだ鳴っていた。」と三次調査を締めくくられています。

これほどいろいろあると、このあとも順風満帆とはいかないのではないかと、逆に思えてくるのではないのでしょうか？そのとおりなのですが…。(村) R2. 4. 3



正面の丘陵が、倉田氏が災害後段畠がずり落ちていたと記す付近

有田の陶磁史 (128)

前回は、第三次調査の際に起こった 42 水の話でした。その続きです。

ほとんど何もできなかった第三次調査の継続という形で、同じ年度の昭和 43 (1968) 年 2 月に第四次調査が組まれました。今回は、2 日から 18 日まで、17 日間の調査です。ちなみに、夏の三次調査は台風でしたが、この時は大雪だったそうです。そのため、続く五次調査に訪れた際に、「天狗谷調査団は、災害をもって来るようですねえ。」と町の方々から冗談を言われたと、倉田氏が記しています。

四次調査では、前回できなかった A 窯の全容を把握するため、上方へと掘り進められました。そして、一番古い A 窯が、予想外にも 16 もの焼成室を持つ、大きな登り窯であることが判明したのです。ただ、課題として残る A 窯と D 窯の新旧関係については、相変わらず、層位的には確認することができませんでした。

そして、同じ昭和 43 年 9 月 9 日から 20 日には、引き続き、第五次調査が行われました。すでに A 窯の全容が押さえられたため、残りは部分的にしか発見できていない D 窯の走行方向をつかむことや、B 窯の窯尻を探すこと、D 窯と A 窯や B 窯の層位的関係がつかめるならつかみたいなど、すでに最終の補足調査の位置づけでした。この時点では、五次調査で発掘が完了する予定だったのです。

とりあえず、A窯の窯周りの状況確認に続いて、思いがけなくD窯の窯尻の溝まで押さえられたことで、調査は順調に進んでいました。続いて、D窯の方向を押さえるため、下部の延長線上にあるB窯の床下を試掘しました。すると、下から11室目の奥壁付近の床下に磁器片がびっしりと埋められているのが発見され、12室目ではB窯が窯尻の位置を変えて造り替えられていることなども判明したのです。16日までに、予期せぬ新たな知見も加わり、補足調査は着々と終わりに近づきました。調査期間は、残すとこあと2日。

17日からは、A窯とD窯の層位的関係をつかめないかのダメ押し、そしてA窯の床下には窯がないことの最終確認が行われました。まず、A窯最上室の第16室の床面の一部に試掘が入れられました。特に何もなく、深さ1mで地山に到達しました。これで、また一步終了に近づいたのです。めでたし、めでたし…。なら、いいんですけどね。この調査が、そんなに何事もなく順調に進むわけないでしょ。（村）R2.4.10



B窯 11室奥壁下の遺物出土状況
写真上部の紫色に見えるのが、11室の奥壁である。

有田の陶磁史 (129)

予期せぬ私的な理由で2週間もご無沙汰してしまい、大変失礼いたしました。今後は、できる限り穴を開けないように、せいぜい精進したいと思います。

さて、現在ちまたでは、新型コロナで大変なことになってますが、皆さまもくれぐれも大事に至らぬようにご用心ください。その影響で、有田ではちょうど例年ならにぎわっているはずの陶器市が無期延期され、こちらもしっかり今後有田で語り継がれるであろう重大事件となってしまっています。何しろ、陶器市の中止は戦時中以来のことですので、もうその記憶がある方もあまりいらっしやらないのではないのでしょうか。この時期に、町なかを車でスイスイ走れるのは、何だかちょっと違和感アリアリですが、ゴールデンウィーク中はおうちでじっとしとくようというお達しですので、お言葉に甘えて巣ごもりさせていただこうかと思っています。もともと、あちこち外出する方がかえってストレス感じる引きこもり性格ですので、まったくノー・プロブレムです。

さて、そろそろ本題に入りますが、今回は、補足調査として位置づけた、昭和43(1968)年9月9日から20日の予定で実施された第五次調査が、珍しく、順調に進んだという話でした。

四次調査で、最も古いA窯が予想に反して16もの焼成室を持つ大規模な登り窯であることが確認され、五次調査ではD窯の窯尻を発見することができました。そして、ちょっとしたハプニングですが、続いてD窯の走行方向を確認するため、下方の延長線上にあるB窯の下から11室目の床下を試掘したところ、

奥壁付近の床下に磁器片がびっしりと埋められているのが発見され、その上の 12 室の床下から、造り替え前の古い時期の B 窯の窯尻が出てきたのです。

本当に調査が完了するのかなってヒヤリですが、このくらいの想定外は、発掘調査には付きものです。

残すところ残り 4 日の 17 日からは、A 窯より下層にさらに古い窯がないか、念のためにダメ押しです。とりあえず、A 窯の最上室である第 16 室の床下を一部を掘り下げたところ、何も発見されませんでした。

というところで、今回は、めでたし、めでたしで、終わってました。続きです。

A 窯第 16 室の床下で何も発見されなかったことで、これで補足調査も無事終了となるかと思われました。念のため、引き続き、その下の第 15 室の床下に挑みました。倉田氏は、次のように記されています。

「A一五室の砂床を、奥壁沿いに幅一米のトレンチ（注：試掘溝）を入れた。砂床を二五糎掘り下げたところ、驚くべきことに、窯壁片、トチン、ハマ等々の窯道具が出てきた。さらに掘り下げると、松梅水瓶、飴釉の碗などが出土した。また窓絵の碗が出土した。突嗟に思ったことは、これが A 窯当初の製品で、われわれが、これまで調査してきた床は、A 窯の補修床ではないか、ということだった。しかし、一・三米も高く補修するということはあるにあり得ないことである。また、われわれの眼をさらに驚かせたことは、A 窯より、どちらかといえば B 窯に近いと感じさせる窓絵の碗の出土であった。有田磁器創業の窯と信じていた A 窯の整美な窯列の下に、まだ一つの窯が埋もれているのかもしれないという新知見は、様式論のもつ危険性を深く感じさせた。そういえば、この調査の長い期間の間に、A 窯出土品より古い磁器がある、という見解は、だれにも聞いた覚えはなかった。」

さあ、大変です。最後の補足調査のつもりが、もしかして、出てはいけないものを掘り当ててしまった…のかも？しかも、一番古いと信じていた A 窯の下からの発見ですから、本当に窯なら、このままでは終われなくなるかもです。

「様式論のもつ危険性」って、今では発掘調査資料などが積み上がって層位的な確認ができますので、だいぶ目立たなくなりましたが、この天狗谷窯跡の調査の頃どころか、昭和期頃までは、様式論がバリバリの証明の大黒柱（死語？）でしたから。様式論なんて、本当は、仮定するための方法論であって、それで何かを証明できるわけではないんですけど…。

さあ、とりあえず、次はどういう展開が待ってるんでしょうね？（村）R2.5.1



A 窯と E 窯の重複状況（A-11 室）

上部にある高い窯壁が A 窯で、その手前側の低い窯壁が E 窯である。

有田の陶磁史 (130)

前回は、予定どおり調査を完了するために、もしかしたら、出したらいけないものを掘り当ててしまったかも？ってところまででした。

調査予定最終日の18日は、前日に窯道具や松梅瓶・飴釉碗などの製品の出土したA窯15室下の、14室から11室の床下の試掘が順次はじまりました。すると、やはりA窯とは壁面の位置が異なる、別の窯が現れたのです。やっぱり当たりましたね。ちなみに、窯は所属不明のX窯を除き、発見順にAから順に名称を付していたため、D窯に続く、E窯と命名されています。ただし、焼成室数が不明であるため、仮にA窯の13室部分で発見された焼成室をE13室などと表現することにしました。驚がくの出来事は、このE13室で起こったのです。倉田氏は、次のように記します。

「この日、最もわれわれを動揺させた事実は、E一三室で起こった。E一三室の奥壁に沿って、南側半分を掘りさげている時に、青磁の影青（註：いんちん/青白磁の中国名。陰刻した部分に釉が厚くたまり、青磁色に発色したもの）の水瓶が五点、ごろごろと出土したのである。初期伊万里の染付の磁器以前に、優品の青磁が焼かれていた、ということは、常識として、考えられないことである。」

つい直前まで、最古の窯として疑わなかったA窯の染付製品以前に、青磁が焼かれていたという事実は、当時主流であった様式学的な捉え方では理解の及ばないことだったので。しかし、たとえ先端の様式学的な理論に反しようとも、客観的条件が整う限り、発掘調査の結果は、歴史の真実なのは間違いありません。

こうしたことは、この天狗谷窯跡の発掘にとどまらず、その後も多くの事例があります。たとえば、様式上は古九谷様式や柿右衛門様式より新しい、初期伊万里様式の製品だって存在します。また、初期伊万里は高台径が小さいなどと言われますが、口径の2分の1をはるかに超えるものも存在します。これは、発掘調査成果では証明できますが、いくら製品を穴が開くほど眺めても、様式学的理論では真理には到達できません。近世陶磁史分野への考古学の参入は、まったく新しい研究スタイルの時代を切り開いたのです。

この調査最終日、青木類次有田町長、今泉今右衛門父子（註：12代・13代。現在の当代は14代）らの遺跡来訪があり、調査の継続に骨を折るとの返答を得て、この五次調査は終了しました。補足調査のつもりが、またまた継続となったのです。（村）R2.5.8



天狗谷E窯 13室床面出土青磁瓶

有田の陶磁史 (131)

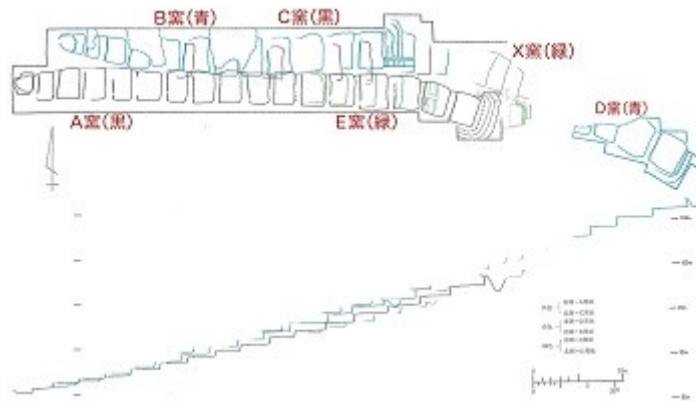
予想外の展開により継続となった六次調査は、五次調査から2年ほどたった昭和45（1970）年11月13日から19日に実施されました。しかし、五次調査の際にE13室床面で青磁瓶が出土したという事実については、なかなか現実のこととしては周囲に受け入れられなかったようです。倉田氏の記述から拾ってみます。

「染付以前に天狗谷で青磁が焼かれていた、という成果は、しかしながら、磁器研究家の方々には、容易には受け入れられず、「いや、誰も信じてくれないんだよ。」と三上団長を嘆かせた。「仕方がないから、こんどは、有田磁器を研究している人たちを現場に呼んで、みんなの見ている前で掘るより仕様がいないね。」馬鹿々々しいが、それ以外の方法はないようである。そのことが済めば、天狗谷窯址の調査は、一応終止符を打つわけである。E窯の床に青磁の水瓶よ、まだあれよ、である。」

今日では、近世陶磁史を研究する上で、考古学が欠くことのできない分野に成長したことは周知のとおりです。しかし、かつての陶磁史研究は、伝世品を中心とする美術史的な研究が主流で、考古学は遺構について発言することはできても、なかなか製品については言及することはできませんでした。そのため、考古学的見地から従来とは異なる客観的な真実が判明しても、それがすんなりと、世の中に事実として受け入れられたわけではなかったのです。極論ではありますが、いわば考古学は、様式学的研究の基礎資料となる陶片をたくさん掘り出してくれる、単なる便利な分野だったとも言えるのです。

六次調査の主眼は、やはり五次調査で発見された、最古のE窯の把握でした。そのため、極力A窯の窯壁等を壊さずに、A10室から16室の砂床を掘り抜いて、E窯の奥壁・側壁を追求すること。また、可能ならば、E窯の窯尻を捉えることが目指されました。ただし、調査とともに、A窯よりもE窯の傾斜が緩かったことが判明し、E11室を最後に、それ以下の焼成室ではE窯は遺存していないことが判明しました。しかし、A15室の砂床下ではE窯の窯尻が発見され、E窯の上限を確認することはできたのです。

さて、残る懸案事項は五次調査で青磁瓶が出土したE 13 室です。続けたいのはやまやまですが、まだ長くなりそうなので、また次回。(村) R2. 5. 15



天狗谷窯跡実測図 (発掘調査報告書より)

有田の陶磁史 (132)

前回は、E 窯がA 窯よりも傾斜が緩かった関係で、E 11 室以下は遺存していなかったこと、そして窯尻まで発見され、残るは懸案の五次調査で床面で青磁瓶が出土したE 13 室ってところで終わってました。続きです。倉田氏の記述から追ってみます。

「問題のE 窯一三の精査は、池田(註:池田忠一 郷土史家・有田町文化財保護委員)・久保(註:久保英雄(蕉破) 陶芸家・有田町文化財保護委員)氏ならびに今右衛門窯の今泉善詔(註:十三代今右衛門)氏らが見守る中で行なわれた。奥壁に沿って掘り下げられた。すでに前回の調査で南半分は砂床まで出されているので、今回は、北半分の部分で、青磁が、どのような状態で出土するかを見ようとするのである。まず、奥壁に接して、側壁と天井の崩落したトンバイを排除した。このトンバイ層は、E 窯が崩壊した時の様子をそのままに、分厚く、隙間を作っていた。この層を取り除くと、炭と土が、床面までの一〇糎ばかりの間に填まっていたが、トンバイで保護されているためだろう、さらさらした感じだった。窯室の中心線から、次第に北に追っていった。なかなか遺物にぶつからない。「ひょっとすると、窯室の南奥の隅だけに遺存されていたのだろうか。」という考えが頭をかすめた。しかし、あと、二〇糎ばかり掘り進めたら北の壁にぶちあたってしまうという位置で青磁の影青の水瓶が出土した。その隣りにも、もう一点出土した。砂床の直上である。「よし、間違いなく、A 窯より古い。」三上団長が大きく頷かれた。見ている方たちも、「おう。」と一斉に声を挙げた。天狗谷ではじめて焼かれた磁器は、素朴な染付の碗ばかりではなかった。一見、李朝そのものといってよい優れた青磁も焼かれていたことになる。技術の伝播を明らかに立証するに足る資料である。」

幸運にも青磁瓶がまだ残っており、最後の最後の締めとしては、めでたし、めでたしといったところでしょうか。このあと、A 窯側壁外の状態を確認する補足調査を行い、一連の天狗谷窯跡の発掘調査は完了しました。倉田氏は、文章の締めくくりとして、次のように記されています。

「調査のあと、天狗谷窯を保存することになったが、一雨ごとに地形を変えてしまいそうな谷に残された天狗谷窯が永く健在であることを、われわれは、町の方々以上に希って止まない。いろいろなできごとのあった有田の町並を、あらためて懐かしい思いで見回しながら、遺跡から宿舎への道を歩いて帰った。その夕、札の辻の交叉点近くで、飲んだコーヒーが殊のほか、おいしく感ぜられた。道路工事そのほかで、次々に窯址が破壊されている有田町が、保護対策を建て、貴重な一窯一窯を、護ってくださることを深く念じている。天狗谷窯の重要さはいままでもないが、重要な窯が天狗谷窯ばかりでないことも当然である。一つの窯それぞれは、一つの窯それぞれの歴史をもっている。一つの窯それぞれの歴史は、日本における磁器の歴史の一環を担っている。遺跡をして語らしめようとするならば、語らせるその日まで静かに眠らせるべきであろう。」

さまざまな、苦難や驚きの連続でしたが、こうして有田ではじめて考古学的手法の導入された天狗谷窯跡の現地調査は完了したのです。ところが、この調査の波乱は、まだ、これで終わったわけではなかったのです。（村）R2. 5. 22



天狗谷窯跡E-13 室青磁瓶出土状況

有田の陶磁史 (133)

前回まで、昭和 40（1965）年から昭和 45（1970）年にかけて六次の発掘調査が行われた、天狗谷窯跡について記してきました。調査が何度も分割されているため、時系列に沿った記述では全体像が把握しにくいので、ここで全体を通じて、調査の結果についてまとめておきたいと思います。

この一連の調査では、当初の予想に反して 5 基以上と推定される登り窯跡が発見されました。窯跡は二列並んで西から東方向へと登っており、土層の重複関係から、1 基ずつ順次築かれ、2 基以上が同時に操業することはなかったことが判明しています。それぞれの窯には、A 窯、B 窯、C 窯などアルファベットの名称が冠されていますが、これは発見された順番を表しています。つまり、調査に先立つ製陶工場新設に伴う鍬入れ式の際に発見されたのが A 窯、一次調査の際に A 窯に一部覆いかぶさるような状況で発見された B 窯、同じく B 窯の上に重複して部分的に遺存していた C 窯、当初から谷の東側の高い部分に一部窯壁が露出しており二次調査で発掘された D 窯、そして、五次調査で A 窯の床下より発見された E 窯です。また、二次調査の際に、B 窯の上方の D 窯との間に、帰属する窯の不明な 3 つの焼成室が発見されており、これは X 窯と命名されています。これらの窯の関係については、発掘調査報告書の中で、調査団長の三上次男氏は以下のように記されています。

「第一、天狗谷古窯址の発掘調査で、まずわれわれを驚かせたのは、天狗谷の一角に築設された窯の多さであり、それらの年代的関係の複雑さである。はじめわれわれは、この狭い地点に築かれた窯は、従来の経験から一基か、たかだか二基と考えていたのであるが、発掘の結果、明確に独立の窯として現れたのは、A・B・C・D・E の五基に達した。そうして、それらのほとんどは同一箇所に、下層から上層にと、たがいに重なりあいながら築かれていた。そのうちもっとも下層に築かれていたのが E 窯であり、その上に A 窯が築かれ、さらにその上層に、A 窯の位置と一部相重なりながら B 窯が存在する。そうして最上層に C 窯が現れた。ただ五窯のうち D 窯は、はるか上方にあり、またその下部の窯室が壊れて消滅しているため、他の四窯との層位関係は明確にできなかった。しかしこの窯については出土遺物から他の諸窯との関係が推定できる。その結果、これらの五窯を、築かれた年代順にならべると E—A—D—B—C 窯の順序となった。これらの五窯のほか、B 窯の最上部と現在遺

存しているD窯の最下部との中間に窯室が存在した。しかし、これはB窯の一部とすることも、D窯の一部とすることも窯室の位置上、困難である。そこで仮りにこれをX窯と名付けたが、もしこれがD窯あるいはB窯と関係がないとすると、さらにD-B窯の間に一窯が存在したことになるが、実情は不明である。」

調査事例が少なく、手探り状態であったにも関わらず、発掘自体は客観的な層位学的手法に忠実に行われ、極めて質の高い調査が継続されたことに驚かされます。D窯やX窯といった帰属に課題の残る窯体ができってしまったことも、逆に、層位学に忠実であった故の限界であり、当時の学術的な蓄積では、これ以上踏み込むことは調査の客観性の維持において困難だったものと推察されます。

このD窯の位置づけやX窯の帰属については、倉田芳郎氏も物原の調査が実現できなかったことも含めて、のちのちまで心残りだと悔やんでおられました。死んでも死にきれないとも。倉田氏は、平成18(2006)年に亡くなりましたが、実は、その現場を指揮された発掘調査から30数年の後、ようやく、この問題を解決することができました。保存整備事業に伴う平成11(1999)年度から平成13(2001)年度に渡る3次の発掘調査により、D窯はB窯の一部であること、そしてX窯はB窯とC窯の一部に分かれることなどが判明したのです。つまり、5基以上と考えられていた天狗谷窯跡の窯体は、最終的にA・B・C・E窯の4基の構成となったのです。何とか、倉田氏のご存命のうちに解決でき、大変喜んでおられた姿が、今でも思い出されます。(村) R2.5.29



天狗谷窯跡遺構配置図（天狗谷窯跡の総合説明板より）

有田の陶磁史 (134)

前回までに、一通り天狗谷窯跡の発掘調査について、時系列的にお話ししてきました。そもそも、この発掘調査について詳述してきたのは、かつての通説…、つまり「元和二年に、朝鮮人陶工李参平が、泉山で陶石を発見し、白川天狗谷に窯を築いて、日本初の磁器を創始した」と話してですが、その Teppan（鉄板）化に強い影響を与えた発掘調査についてちゃんとお話ししておくのが目的でした。ただ、なかなか

かいろんなことに一喜一憂する調査だったものの、記していたら、ずいぶん長くなってしまいました。そろそろ終わりにしたいのですが、なかなかそうもさせてもらえません。最後にもう一波乱あったからです。

それに、確かに発掘調査の途中にはいろんなことがあったにせよ、「でも、なんでそれで説のテッパン化？」って、当然、思ってしまうよね。もちろん、天狗谷窯跡を発掘調査したら、複数の登り窯跡が出てきたっていうのは紛れもない事実です。でも、それと「元和二年」「李参平」「泉山」「日本初の磁器」などを結び付ける何か、直接発見されたわけではありませんから。ズバリ、ヒントは“科学”です。「???」ってところでしょ、まあ、おいおい分かってきますので、しばしお付き合いください。

ちなみに、発掘調査継続中の頃にも並行して行っていた東京での整理作業も、なかなか大変だったようです。発掘調査報告書には“火のないところに煙が立った”とありますが、「天狗谷窯出土資料散逸か？」の新聞報道がなされたのです。

ただ、もう一波乱とは、このことではありません。従来の観念的な捉え方を廃して、科学的な視点から歴史を解明するという姿勢により、発掘調査自体は、考古学という人文科学の手法にのっとり進められました。そういう意味では、はじめて学術的なレベルで行われた調査だということもできます。ところが、この科学を過信しすぎたところに、大きな落とし穴があったのです。“科学”というお題目に絶大な信頼を寄せすぎたことにより、逆に、結果として、観念的な捉え方に引き寄せられてしまったのです。それは、天狗谷窯跡の操業年代に関することでした。

天狗谷の各窯の新旧関係については、層的な面から客観的に把握することが可能でした。ただし、丘陵の上方だけで発見されたD窯については捉えられないため、出土製品の様式的観点から、A窯とB窯の間に位置づけられています。ただ、こうした断片的な部分について推論を挟むことはあっても、客観性を保つためには、全体的な窯場の実年代などには、やはり科学の力は不可欠でした。個々の感覚的な年代推定では、万人の認める根拠とすることは難しいからです。おそらく、「李参平の窯」という観念的な説に偏りがちな地元の声に流されないためにも、徹底した科学的な姿勢が必要だったのではないのでしょうか。そのために選ばれたのが、熱残留磁気測定でした。もちろん、当初から計画された予定ではありません。

熱残留磁気測定とは、大ざっぱに言えば、磁石に鉄が引き寄せられるのと同様な原理です。地球は大きな磁石のようなもので、現在は北極にS極、南極にN極があります（地理上の南北とは逆）。遺跡の土中には、磁鉄鉱などのように磁気を帯びやすい鉱物が含まれており、常時磁極に向かって引き寄せられています。ところが、この磁極ですが、常に一定ではなく、時代とともに刻々と移動しているのです。普段考えることもありませんが、長い年月の間には、北極や南極の位置が変わっているということです。そうすると、磁気を帯びた鉱物が引き寄せられる方向は時代とともに異なることになります。しかし、その鉱物が高い温度で熱せられると、その時代の地磁気の方で固定化されてしまうのです。そのため、窯のような高温焼成される遺構の場合、床面の焼土を採集して分析すれば、固定化された地磁気の方角が分かることになります。それを、永年変化曲線と称される各時期のデータと照合するのです。

ということで、これを天狗谷窯跡に活用しようとしたわけですが、これが大混乱の元でした。ただ、まだ話しの続きは長いので、また次回ということで。（村）R2.6.5

有田の陶磁史（135）

前回は、観念論的な捉え方に流されないためにも、徹底した科学的な姿勢を貫き、操業年代の推定に熱残留磁気測定を活用することにしたということでした。もちろん、最初からそういう計画だったわけではありません。

天狗谷窯跡の調査で熱残留磁気測定用の資料（焼成室床面焼土）を採取したのは、昭和43（1968）年2月に実施された第四次調査の直前でした。その際には、その時点で窯体の全貌が判明していたA窯とB窯が選ばれています。もちろん、自然科学のバリバリ最先端の方法ですから、原理的には何の問題もないはず

ずです。よって、これが出された結果を採用すれば、必然的に、即一丁上がり！！やすやすと、科学的であることが担保できるということになります。少なくとも、調査団ではそう考えたとは思いますが。

でも、原理が正しければ、結果も正しいというのは、当然、原理的には正しいはずなのですが、世の中、そう甘くはありません。ですから、本来ならばその真偽の検証を別の科学的な方法でできればベストですが、残念ながら、少なくとも別の自然科学の手法で検証する手段はないのです。では、現在ではどうしてするかと言えば、そこは考古学という人文科学的な方法が発達していますので、それと比較することで、結果の信憑性をさらに高めているわけです。

しかし、さすがにこの天狗谷窯跡の発掘調査当時にそれはムリです。考古学はまだまだ手探り状態で、ヒヨッコにもなっていない時期ですから。とりあえず、自然科学の方法で割り出された結果を、ひたすら信じるしかありません。まあ、結果的にはそこに大きな落とし穴があって、最後は、なかなか大胆なパワープレイで乗り切ろうとしたわけですが…。

詳細は省きますが、結論として、A窯については1614～15年と1747年、B窯については1574～92年と1815年の、それぞれ二つの年代が、理論的に取り得る候補として示されたのだそうです。あくまでも、この数値個々に、何の正確性の優劣もありません。すべて対等な関係です。でも、どうですか？何だかきな臭さ満点の年号が見えはじめたでしょ。いや、でもきっと想像以上に、もっとひねりの利いた結論ですよ。

そうすると、これらの数値から、A窯とB窯の年代の組み合わせは、4種類存在することになります。ただし、層位的にA窯よりもB窯が新しいことは確認できているため、A窯1614～15年・B窯1574～92年及び、A窯1747年・B窯1574～92年の二つの組み合わせは成り立たないことになります。残りは二つです。一気に絞られてきました。

ただし、ここでもう少し、発掘調査を通じた考古学的知見による縛りがあります。A窯は磁器創始期の窯だということです。すると、A窯を18世紀とするA窯1747年・B窯1815年の組み合わせもポシャリます。ついに最後の一つです。ところが、層位的には、A・B両窯が連続して操業したってことも動かせない事実なのです。あれっ？ではA窯1614～15年・B窯1815年という、両窯の年代が200年も隔たってしまう組み合わせも、当然「×」ですよ。 「…、…？」 ついに想定可能な組み合わせがなくなってしまいました。

人文科学と自然科学という違いはあれ、同じ科学のタグから導き出した答えですから、“理論上”は、正しい答えがないはずがないのです。でも、理論上はあっても、現実的にないものはないのです。さすがに、これは困った…だろうと思います。

とは言え、やはり数々の苦難を乗り越えてきた調査団です。こんなことでは挫折するはずもありません。どうしたと思いますか？すごい技を編み出すんですが、それについてはまた次回のお楽しみということで。（村）R2.6.12

有田の陶磁史 (136)

さあ、前回は、とうとう天狗谷窯跡のA窯とB窯の熱残留磁気測定において、4種類あった年代の組み合わせのうち、ついに、取り得る組み合わせがなくなってしまいました。これは大変です。

要するに、バリバリの自然科学の王道的方法で抽出された各窯跡の廃棄年代でしたが、いざ人文科学の最先端である考古学的成果と組み合わせようとすると、どの数値の組み合わせもどこかに矛盾が出てしまうのです。かと言って、人文科学と自然科学という、科学と科学のガチンコ勝負ですから、お互いそう簡単に引くわけにもいきません。それで、調査団も相当考えたんでしょうね。ついに、どちらも傷つかない(?)、いいとこ取りのすごい理論が組み立てられたのです。

発掘調査では、B窯の上に重複する形で、C窯というより新しい窯が築かれています。ただし、発見されたC窯は一部の焼成室のみで、削平されて全部は残っていませんでした。少なくとも、B窯の測定用に資料採取された部分では残っていませんでした。しかし、当然もともとはあったはずだと考えたのです。ここからがすごいです。魔法を使いますので、よく読んでください。

B窯で加熱されて一旦磁気が固定化したが、新しいC窯の焼成に際して、床下に位置するB窯の床面も再加熱され、再びC窯の焼成時の地磁気の方に変わった……と考えたのです。

そうきましたか。

確かに、それならA窯：標準年 1614～15年（上限・下限年代：1608～27年）、C窯：標準年 1815年（上限・下限年代：1775～1855年）という組み合わせなら、成り立ちそうです。条件1）層位的にA窯よりB窯が新しい。クリアです。条件2）A窯は磁器創始期の窯である。おみごと、クリアです。条件3）A・B両窯は連続して操業した窯である。B窯ではなくC窯の分析結果と読み替えただけですから連続している必要はないので、パーフェクトです。ですから、互いの科学のプライドを傷つけることなく、層位的にも、成り立つわけです。しかも、唯一の組み合わせなので、逆に言えば、この年代以外には考えられない組み合わせ、という飛躍にも繋がるわけです。

しかし、よく考えてみてください。これは実は何ら自然科学的な必然に基づく、B窯からC窯への変更ではありません。あくまでもB窯としての測定結果ですから。単純に、これなら層位的にも矛盾しないという屁理屈付けただけで、何ら科学的ではないわけです。

ただ、もうこうなると、調査報告書の考察の部分などでは、本当はB窯を分析していることなどは、微塵の痕跡も残されません。科学的根拠に基づく、A窯とC窯の分析結果であることを前提に、論が組み立てられていったのです。

この調査は、本来、“白磁創業期の重要な窯の発掘調査”という位置づけで行われています。つまり、おおかたの関心は苦勞して意義づけしたC窯の1815年ではなく、A窯の1614～15年という数値なのは言うまでもありません。

しかも、この数値は、磁極に引きつけられる鉱物と同様に、磁器創業期という意味においては、相当ぐつと引きつけられる値なのは当然です。もちろん、磁器創始の通説が、元和2（1616）年だからです。

さあ、大変なことになってきました。これからどうなっていくんでしょうね。（村）R2. 6. 19

有田の陶磁史（137）

前回、この一連の天狗谷窯跡の発掘調査では、窯の操業年代は熱残留磁気測定という科学的な方法で導き出されたものだという事を記しました。まあ、正確に言えば、測定したのはB窯のはずなのに、いわば究極の Magic でC窯の測定結果にドロクさせただけですから、“これのいったいどこが科学なのっ？”って突っ込みを入れたくはなりますが、今さらどうにもなりませんので、とりあえず置いときます。この年代的な結論として、調査団長の三上次男氏は以下のように総括されています。

「熱残留磁気による年代測定の結果、A窯の廃止時の標準年は一六一四～一五年となったが、誤差を考察に入れると上限は一六〇三年、下限は一六二七年まで年次をひろげることができるという。このA窯の年代から、われわれは天狗谷古窯の創設された年次に関し、いろいろの可能性をひきだすことができるが、それはだいたい三つに集約することができる。第一はA窯の廃止時の年次を標準年にしたがって一六一四～一五とした場合、A窯の創築された年次は、A窯の存続年代だけこれより早くなり、またA窯に先立つE窯の築造年次はこれよりもさらに早くなる。その結果、天狗谷古窯の創設は一七世紀の初頭に近い年次となろう。いまもし、E・A両窯の存続年代を合わせて一〇年前後とすると、E窯の創築

年次は一六〇四～五となり、両窯合しての存続年がこれより永ければ、E窯の創築年次はこれより古い。反対に存続年がこれより短いこともありうる訳である。

第二に、A窯の廃止年代を測定値の上限である一六〇三とすると、第一の場合と同じような理由によって、E窯の創築時は一六世紀の末期となる。しかしそうすると、これは秀吉の朝鮮出兵と同時、あるいはそれ以前に磁器窯が築かれたこととなり、不自然の観をまぬがれない。したがって第二の考え方は可能性がうすい。

第三としてA窯の廃止期を、下限の一六二七とすることも可能である。そうしてE・A両窯の存続年代を一〇年前後とすれば、E窯の創築期は一六一七年前後となる。これは可能性のうちではもっとも遅い年次であるが、もし、これを採るとすると、天狗谷古窯は一六一六年（元和二年）、李参平によって創始されたとする伝承とほぼ同じ年次となる。しかしこれらの推定は、あくまでも両窯の存続年代を合わせて一〇年仮定してのことであるから決定的ということとはできず、若干の早・遅の可能性はある。」

どうでしょうか？さすがに、ちゃんとそれぞれの可能性を提示して、客観的に検証されています。この期に及んでも、まだまだ科学（つぼく）してますね。実は、まとめはこのあともう少し続くのですが、このあたりはベリー・ベリー重要ですから、ここいらでちょっと頭の整理をしておくことにします。

まず、この三つの捉え方によって、天狗谷窯跡の創業は、上限では秀吉時代まで遡り、中間を取ると1600年代初頭、下限では1617年前後となって李参平の伝承である1616年とほぼ同じ頃ということになるという内容でした。

では、ここで問題です。この中で、有力候補になったのはどれでしょう…？

…実に愚問でした。

秀吉どころか1600年代初頭でも、まだ有田では磁器どころか陶器すら焼いてないかもしれません。言うまでもなく“下限”デス。やっぱり自然科学と人文科学の強力タッグですから、ちゃんと伝承とピッタリ合う正しい方向に導かれるんですね？

でも、ちょっと…??そもそも、ストーリーの展開上、“下限”でないとオチが付かないのは重々承知しておりますが、それって本当に自然科学の分析結果として、1616年とほぼ同じ年次になったんでしょうか？つまり、科学的に割り出された数値かってことです。確かにB窯とC窯の件では、ちょっとしたMagicも披露されましたが、少なくとも、A窯の分析についてはこれっぽっちも不審な点はないはずですよ。

やはり、ここは科学一本で押し切りたいところでもありますし。ところが、「あくまでも両窯の存続年代を合わせて一〇年仮定してのことである」という部分に注目です。つまり、あくまでも、分析結果の下限自体は1627年です。これがなぜ、1616年に近づいたかと言えば、E・A窯を合わせた操業年代を10年と“仮定”したからです。でも、考えたら分かりますが、この10年という仮定自体は、何らの科学的根拠もありません。なぜ10年なのかという説明すらありません。ですから、極論すれば、5年だろうが、20年だろうが、100年だろうが、どのようにでも随意に決めてもいいわけです。別に根拠はないんですから。何年がお好みですか??

まあ、完全に科学でない当てずっぽうですが、ここは頭のどこかに1616年という年号がチラつきつつ、「さて、E・A窯の操業期間は、いったい何年くらいだろうか？」って考えたんだとは思いませんか？決して、まず1616年が先にあって、それに合わせるために恣意的に10年という期間を当てはめたとは思いません。だって、地元ではお題目のように“李参平の窯、李参平の窯”って唱え続けられたわけですから、きっともう脳ミソの中は、“1616年、1616年”だったはずですから。ってわけで、残念ながら、ここはちょっと“科学”してませんでした。

でも、この1616年って年号も、ずいぶん罪作りです。そもそもこの年号ってそんなに引っ張られるものでしたっけ？ちょっと、以前お話ししたことを思い出してください。ずいぶん昔のことなので、忘れられ

ているとは思いますが。この李参平の元和2年(1616)磁器創始の“伝承”と称されるものは、知る限りですが、昭和11(1936)年の中島浩氣著『肥前陶磁史考』にはじめて記されるものです。つまり、実は、昭和期発の“伝承”なんです。天狗谷窯跡の発掘調査報告書が刊行されたのが昭和47(1972)年ですから、そのわずか40年足らず前というわけですね。ですから、当然それを知ってれば引っ張られなかったでしょうが、知らなかったから吸引力抜群だったんでしょうね。やっぱり、研究史も調べておくことは大切ですね。って、長々だらだらと研究史書いてる言い訳ですが…。(村) R2.6.26

有田の陶磁史 (138)

今回は、天狗谷窯跡調査団長の三上次男氏による、創業時期の総括の途中まででした。熱残留磁気測定の結果から、天狗谷窯跡の創業時期の上限は、豊臣秀吉時代、中間だと1600年代初頭頃、下限だと李参平の伝承にあるような1616年頃ということになるんです。三上氏の総括を続けます。

「(3つの捉え方の)いずれにせよ、天狗谷古窯の創設された年次はもっとも遅く考えても一六一六年には築かれていたことは確かであり、実際それよりも早く生まれていた可能性がある。もし創築が一六一六年(元和二年)より早かったとすれば、伝承の一六一六年は有田磁器あるいは李参平にとって、何らかの特記すべき重要な記念の年であり、そのためとくに一六一六年が強調されたものと思われる。先にE窯の製品に陶器的性格が色濃く残っていることを述べたが、あるいは陶工はE窯を試作窯、A窯を完成窯と考えていたかも知れない。」

いかがでしょうか？前回からの続きですが、もちろん、かなり慎重に言葉を選ばれ、あくまでも可能性の話として記されており、何ら断定的な結論を示されているわけではありません。でも、こう書かれると、何となく李参平や1616年という年号と関連がありそうに思えてくるでしょ？往々にして、結論って独り歩きするものです。

ただ、内容を仔細に解釈すれば、「何それ？」ってことなんですけどね。ただし、あくまでも悪意や意識的だとは思いませんよ。本当に、当時はそう考えざるを得ない状況だったと思いますので。

まずは、1616年という年代のTRICK(?)について、ご説明いたします。

この件については前回も触れましたが、熱残留磁気測定の結果、A窯の廃窯年は下限では1627年になるんだそうです。この数値自体は科学的な測定結果ですから、当たってようが当たってまいが信じるしかありません。問題はここからです。

ここで調査団では、E窯とA窯を合わせた存続期間を10年と仮定しました。仮定ですよ。そうすると、1627年-10年で、E窯のはじまりは1617年ということになります。つまり、前回もお話したとおり、みごと1616年を意識させる年代になったわけです。でも、考えてみてください。下限が1627年ということですから、別に1626年という仮定でも構わないわけです。そうすると、存続期間を10年とすれば、ピッタリ1616年にすることも可能なわけです。別の方法もあります。存続期間を11年と仮定する方法です。当然、これでも1616年になります。つまり、実際には、科学とは関係なく、どのようにでも自在に年代は操作できるということです。やはり、1616年という年号が頭にあるので、何となくそれと関連付けてしまったということではないでしょうか？

ただ、総括では、別の創業の可能性も示唆されています。E窯をもっと古く位置付ける捉え方です。これは先ほどの要領で、実際のA窯の廃棄を測定年代の下限である1627年より前と考えるか、操業期間をもっと長く考えれば簡単にできます。つまり、磁器の創始が1616年よりも、もっと古くなるということです。

この場合、総括の本文中には「伝承の一六一六年は有田磁器あるいは李参平にとって、何らか特記すべき重要な記念の年であり、そのためとくに一六一六年が強調されたものと思われる。」とありますが、この科学を旨とする調査においては、本来ならば、1616年や李参平の伝承とやは切り離して考えるべきですので、あえて絡めて「何らか特記すべき重要な記念の年」を創出する必然性はないはずで。ところが、絡めたことにより、記念の年とは「陶工はE窯を試作窯、A窯を完成窯と考えていたかも」、つまり、A窯になって1616年にはじめて試作ではない磁器が完成したという、新たな物語を創造する必要性が生じたわけです。

こうした記述により、「白磁創業期の重要な窯の発掘」という指針ではじめられた発掘でしたが、結果的に、抑制しようとした「李参平の窯の発掘」という意識にかなり傾いていることが読み取れるわけです。

とは言え、しかたない面も多々あったことは十分に理解できます。調査の経緯を思い出してみてください。そもそも後世の文献史料に記された曖昧な李参平と天狗谷窯の関係であったものが、工場の新設で、偶然、窯体そのものが発見され、調査期間中に、その近くにあった墓碑が李参平のものであることが確定的となり、おまけに、科学的な手法によって、1616年を匂わず数値まで揃ったのです。調査団がどう考えようが、これが地元で燃える“李参平の窯”説の火に、油を注ぐことにならないわけがありません。有田焼創業350年記念事業としての発掘調査という事情もありますし。以後、科学の力でお墨付きを与えられたことから、学術的な場も含めて、1616年に李参平が天狗谷窯で磁器を創始したという説が急速に Teppan 化したのは言うまでもありません。

これまで長々と記してきましたが、これがかつての磁器創始の通説が、強く信じられるようになった一部始終です。一見科学的なようですが、よくよく見ると、B窯の測定結果をC窯と読み替えたことを皮切りに、実際には肝心なところが科学じゃないことはお分かりいただけただかと思えます。

でも、そもそもその自然科学としての熱残留磁気測定自体は、信頼に足るものなのでしょうか？もちろん理論的には正しいのですが、結果として信頼していいものなのかということです。今回は、ちょっとそのあたりのお話しをしてみたいと思います。（村）R2.7.3

有田の陶磁史 (139)

前回までに、天狗谷窯跡の創業年代については、結局のところ、熱残留磁気測定の結果をそのまま信じて、“李参平の窯”という方向へと引きずり込まれてしまったというような展開でした。これにより天狗谷窯1616年磁器創始説は、科学的に証明された押しも押されぬ堅牢な説としてその後長らく信じられることになるわけですが、そして今…、残念ながらそれはないだろうってことに変わってしまいました。

これは、この昭和40年代の発掘調査時における熱残留磁気測定の結果が間違っていたことならば話しは早いのですが、見てきたように必ずしもそうとも言えないわけです。というのは、B窯の測定結果をC窯と読み替えて、無理やり取り得る年代的な組み合わせを復活させたり、A窯の測定結果の範囲で動かせる年代観やE窯とA窯の操業期間の長さの仮定など、科学的ではない細工を駆使することによって、あるいは、“試作窯と完成窯”論まで創出して、何とか1616年の磁器創始の伝承(?)に辻褃を合わせたというのが本当のところだと思います。看板は“科学”ながら、実は、かなり感覚的な解釈だったということです。

そもそも、これを真に科学的に解釈すればどうなるかと言えば、至極簡単です。自然科学的に4つの取り得る測定結果が割り出されたものの、それには、残念ながら人文科学である考古学的成果と整合する選択肢がなかったということに尽きます。あくまでも、ここで終わりです。どちらかの科学的手法が間違っていたか、あるいは両方間違っていたことも考えられますが、それは本来それぞれ何らかの形で検証すべきもので、それ以上無理やりこねくり回して整合性を図るべきものではないのです。

まあ、とはいえ、天狗谷窯跡の発掘調査当時は前例がなかったので多少の無理は承知で突っ込んだんだと思いますが、今では、有田の窯跡に限っても、多少なりとも熱残留磁気測定の前例がありますので、だいたいどんなものと捉えていいかは感覚的には分かるようになってきています。

たとえば原明窯跡では、A・B窯が偏角から1570年、伏角から1650年、総合して1610±50年。C・D窯は偏角から1550年、伏角から1650年、総合して1600±50年という結果が示されています。ちなみに、残念ながら文系の脳ミソにはちゃんとは理解できませんが、ようするに“偏角”とは真北と磁北の差、“伏角”の方は地球の磁気と地面の傾きの差だそうです。言葉の意味としては理解できるのですが、“だから、なに？”ってところではあるのですが…。

とりあえず、原明窯跡については、現在考古学的に想定される年代の範囲はA・B窯、C・D窯ともに、最大幅で1600～30年代です。よって、1610±50年、つまり1560～1660年とされるA・B窯も、1600±50年、つまり1550～1650年とされるC・D窯も、自然科学と人文科学の結果が重なっていることとなります。これだと、少なくとも理論上は正しいはずの科学的調査・測定の結果がほぼ一致したわけですから、通常は、より真実である信憑性が高くなったと考えるわけです。

ところが、小溝下窯跡のような例もあります。原明窯跡の操業後半期の組成と同じく陶器と磁器を併焼した窯ですが、この場合は、熱残留磁気測定では1690±30年、つまり1660～1720年という結果が提示されています。こちらは、考古学的に推定される1610～30年代と比べて、あまり具合がよろしくありません。ただ、だからと言って、天狗谷窯跡のように、ムリクリ整合性の取れる画期的な必殺技を編み出して、たとえば、1630年代に一度廃窯となって1660年代に再興したみたいな妄想を起こすのは禁物です。世の中、歩み寄りや妥協は付き物とはいえ、こういう場合は、お互いに理解を示して譲歩しあうべき性質のものではないからです。逆に、自然科学の方法が間違いだ、いや人文科学の誤りだと言ってみても、しょせんは水掛け論に過ぎません。これ以上科学的にはどうしようもないので、スッパリと諦めることあるのみです。

では、同じ自然科学と人文科学の結論が一致しない例でも、次のような場合はどうでしょうか。実は、柿右衛門窯跡の発掘調査でも、熱残留磁気測定が行われています。こちらの測定結果は、A窯跡が1810±30年、B窯跡が1780±30年、つまり、A窯跡1780～1840年、B窯跡1750～1810年代ということになり、両窯ともに18世紀後半～19世紀前半の窯跡ということになります。

ここでは、考古学的年代観にはとりあえず触れないことにして、単純にこの熱残留磁気測定の結果を信じて歴史を組み立ててみます。周知のとおり、柿右衛門窯跡では、いわゆる柿右衛門様式の製品が生産されています。これは考古学がどうかではなく、窯跡から採取できる陶片を見れば分かる純然たる事実に過ぎません。そうすると、それらは必然的に18世紀後半以降の製品ということになります。

ところで、ヨーロッパでは18世紀初頭に磁器が誕生しましたが、すでに18世紀前半には、マイセンをはじめとして、柿右衛門様式風な製品も多く作られています。すると、実は柿右衛門様式はヨーロッパなどで生まれたものを逆に日本で模倣したということにしないと、辻褄が合わないことになるわけです。さあ、それでも熱残留磁気測定の結果が正しいと思いますか？

こうした事例から、果たして、科学的であるということを根拠に、熱残留磁気測定の結果をひたすら信じていいものだろうかという疑問、つまり頭の中に「???’がたくさん浮かんでしまいます。もちろん、人文科学的方法よりも、先端の自然科学的方法の方が信頼性がありそうな気がするのはごもっともです。でも、片方だけ批評するのも不公平ですので、今回は、考古学的方法について検証してみることにします。（村）R2. 7. 13

有田の陶磁史 (140)

前回は、“熱残留磁気測定って使えね～！…かも？”って話でした。でも、“いや、本当は考古学の方が間違ってるんじゃないの？”ってご意見もあるかと思います。ごもっともです。ですから、人文科学的な方法である、考古学は本当に年代推定に使えるのか、というのが本日のお題です。

さて、天狗谷B窯で測定したC窯の熱残留磁気測定による Magic 年代は、標準年 1815 年（上限・下限年代：1775～1855 年）という結果でした。では、現状の考古学の世界でC窯はいかに捉えられているかと言えば、B窯に引き続いて操業した 1660 年代前後の窯という推定です。よって、何とその差は 100 年から 200 年近くもあることになります。

精密機器が“ピピッ”と結果を出してくれる…、かどうかは知りませんが、そういうデジタルな自然科学の方法とは異なり、人文科学である考古学の年代推定の方法は実にアナログです。元になるのは、主に大量に蓄積された出土資料などなわけですが、ただひたすら根気と辛抱あるのみ。場合によっては人海戦術ができることもありますが、ほとんどは、収蔵コンテナ動かしつつ一人孤独に出土資料一つ一つの格闘です。しかし、これにより今日では、有田焼の創業から近代に至る製品の変遷を、数年から 20 年程度の単位で連続と組み上げた陶磁器編年というものができあがっているのです。

その原理については、まあ、考古学経験者なら説明の必要もないでしょうが、一見すると以前天狗谷窯跡の調査の話の際に出てきた、危うい“様式論”と同じようにも見えてしまいます。でも、結果は同じのようでも、それが導かれるプロセスがちょっと異なります。

たとえば、A → □ → C → ○ → E → F という技法の変化が出土資料から読み取れたとします。それでは、□と○には何の文字が入ると思いますか？アホらしいですね。当然、□がBで、○にはDが入ると思うでしょ。実は、これが様式論です。要素の近いものから順に並べるわけです。実は、こうした捉え方は、たとえば骨董業界など伝世品を扱う世界では、今でもごく当たり前のように使われています。ところが、ここには思いっきり大きな落とし穴があります。というのは、よく考えてみてください。この様式変化は、実はそう“仮定”できるだけであって、何らの“証明”も伴っていないことはお分かりでしょうか。物事が等しく徐々に変化するって、何か絶対的な自然の法則でもあれば別ですが、これまで生きてきた中で、残念ながらそういう法則にはお目にかかったことがありません。必ず、突然変異が起こります。でも、往々にして、それを証明と錯覚してしまいがちなのです。ここが危うさです。

一方で、考古学の場合は、主に層位学の方法を用います。厳密に言えば、古い時代を扱う考古学と新しい時代を扱う考古学では、学問の形成過程が違いますので、手順などに若干の違いはありますが、とりあえず、原理的には同じです。まず、最初に堆積した土層に含まれる技法がAだとして、3層目にC、5層目にはEが含まれていたとします。様式学的には1層目のAに続く2層目には当然Bがくるはずですが、現実には、そう甘くありません。実際に調べてみると、ある技法においては、2層目もAのまま続いていることもありますし、その上の3層目はBを挟まずにCとなり、4層目もDではなく、すでにFが見られることすらあるのです。新しい技法であるFがEより前にくるなんて信じられないかもしれませんが、外部ですでに完成された技術を導入した場合などは、突然新しい技術が挿入され、それが普及する過程で従来の技術と混じることで、時間軸上はより古い技術との中間的なものが後ろにきたりするので。

また、陶磁器などは商品である以上時代の流行には極めて敏感で、常に変化しています。どの窯でも時代の流行は追いますので、同じ時代なら同じ要素の製品が作られることになります。そして各窯跡の土層で似た要素を持つ土層を探して組み合わせれば、必然的に変化の状況が分かるという理屈です。と言いつつ、恐ろしくイメージしにくい説明ですね。

例え話をします。ある窯では、1、2、3、4、5という順に各要素を持つ土層が堆積していたとします。しかし別の窯では3、4、5、6、7という土層の堆積だったとします。また別の窯では、5、6、7、8、9だったとします。そうすると、一致する数字のところ、つまり、同じ流行が窺える土層どうしで並

べてみると、最初の窯では1～5までの変遷しか追えなかったものが、3つの窯を組み合わせることによって、1～9までの変化を追えることになるわけです。ただ、これは相対的な新旧関係を表す“相対年代”と呼ばれるもので、具体的に何年とかで示す“絶対年代（実年代）”とは異なります。出土資料をいくら穴の開くほど眺めていてもこの絶対年代は分かりませんが、この相対年代の編年に後付けの形で絶対年代を加えていくのが一般的な考古学的方法です。

絶対年代を加える方法はいろいろありますが、たとえば、たまには実年代を記した陶片などが出土することがあります。それによって、それが出土した土層の実年代の概略がつかめるわけです。古文書等で窯の成立や廃棄の年代が分かる場合もあります。また、消費地の遺跡では、大火事や土木工事などの記録がある場合があります。そうすると、その火事や工事の際の土層は、記録された年代以前のものということになります。そのほか、伝世品に年号が記されている場合や、共箱に年号が書かれている場合もあります。その伝世品がどこの窯のどの層の製品と同じ要素を持つかということ調べればよいことになります。そのほかにも、とりあえず地道に実年代を捉えられるものなら何でもアリということですよ。

つまり、実年代の真偽はともかく、相対的な新旧を先にガチガチに固めてしまうのが、考古学的方法というわけです。

(村) R2. 7. 17

有田の陶磁史 (141)

今回は、考古学的方法の概略を説明しました。もちろん、実際にはそんなに単純にはいかないんですけどね。たかが一片の陶片といえども、その中には、生産や消費をはじめ、当時の社会のさまざまなあやが織り込まれているわけですから。ということは、逆にうまく情報さえ引き出せば、陶片からそれが作られた当時の社会を、ある程度再現することも可能ということではあるんですが。まあ、言うは易く行うは難しです。とりあえず、そうやって、現在では近世を通じた陶磁器編年ができあがっているということです。

こうして積み上げられた編年は、陶片の出土土層で前後関係が確認できるわけですから、当然ながら、製品の並び順自体を大きく変えることはできません。

たとえば、一つの碗があるとします。これはもちろん見た目は碗ですが、別の視点で捉えると無数の技術・技法の集合体が、碗という形で見えているものとも解釈できます。したがって、一つの碗を組み上がっている編年のまったく違う年代の部分に挿入しようとすれば、そこに含まれる無数の技術・技法の様相が、その前後とはまったく連続性がなくなってしまうのです。これは、前回お話しした突然外部から新しい技術が入ってきて、製品の見た目がガラッと変わってしまうというようなマクロなレベルでの話しではありません。そうした場合でも、ミクロな無数の技術・技法的な要素の中には、必ず前代との連続性は残るのです。

話を天狗谷窯跡に戻しますが、熱残留磁気測定ではC窯の廃棄年代は、1775～1855年という結果が得られていました。ちなみに、考古学の陶磁器編年ではC窯の製品は1660年代前後です。ところが、もしC窯の出土製品を、その現在の陶磁器編年の1800年前後の部分に組み込もうとすればどうなると思いますか？そうす。技術の連続性などの整合が図れないため、押し込もうにも入る余地がないのです。どこかに異質なものを挟もうと思えば、全体的に編年自体を組み替える必要すら生じてしまいますので。これは、単にモノ一つ、「エイ・ヤー！」ってノリで動かせばいいという話しではないということです。まあ、あえてやろうとするなら、相対年代の順序自体は変えられないので、整合性のある部分に組み込んで、その部分の実年代自体を変える作戦の方がはるかに現実的です。

では、試しにやってみましょう。現代の陶磁器編年の実年代の割り振りがウソで、天狗谷窯の熱残留磁気測定の結果の方が正しかったと仮定してみます。そこで、現在の陶磁器編年の中で、C窯の製品と技術的整合性が図れる部分、つまり1660年代前後の部分に、分析されたC窯の年代を当てはめるとします。つまり、1660年代前後の部分の実年代を1800年前後と置き換えてみるわけです。すると、以後順送りに編年の実年代がずれることとなります。

その場合、現在の考古学的編年ではC窯は1660年代前後ですので、仮に1665年で計算すると、C窯の上限年代の1775年との間に110年、下限の1885年なら220年もの開きがあることとなります。つまり、すべての編年上の製品を110年から220年分、後ろにずらすということです。

そうするとどうなるか？たとえば、C窯の熱残留磁気測定では標準年とされる1815年頃にできた製品について考えてみます。説明がややこしいですね。ようするに、現在の陶磁器編年上1815年頃とされる製品場合、どこまで後世までずれ込むことになるのかという話しです。

まず、上限の1775年とした場合でも、それぞれ編年が110年後ろにずれることとなりますので、1925(大正14)年となります。どうですか？現在の陶磁器編年で19世紀前期頃に位置付けられているものが、実は大正時代にできたものだった…。さすがに、ちょっと苦しいように思えますが、いやいや、このくらいでは。

では、次に下限の1885年だったらどうなるでしょうか。同様に220年後ろにずれますので2035(令和17)年、ついに、近未来の有田焼になってしまいました。タイムマシーンが必要ですね。

上限、下限で計算してみましたので、ついでですので標準年とされる1815年とする場合も、見ておくことにしましょう。ややこしいですが、現在の陶磁器編年の1660年代前後の部分の実年代を1815年とすると、現在陶磁器編年上で1815年頃に位置付けられている製品は、いつ頃生産されたことになるのかということです。1815年と1665年の差がちょうど150年ですので、1815年の150年後、つまり、1965(昭和40)年ということになります。何と、これは驚きの結果です。ちょうど天狗谷窯跡の発掘調査がはじまった年です。登り窯跡を発掘調査すると、同じ頃、同じ場所にあるはずの登り窯で焼いた製品が出土する…??? ややこしいので、もうやめます。

とりあえず、現在の考古学の陶磁器編年は、その相対年代は、微調整はともかく、ほとんど変えることは不可能です。絶対年代については、今後の研究の進展によって変わることもあるかもしれませんが、これとて、先ほど見た例で分かるとおり、大きくイジルことは不可能です。したがって、熱残留磁気測定など自然科学の結果を受け入れようにも、そうできない時もあるのは事実なのです。なぜ論理的には正しいはずの自然科学の方法で適切な答えが得られないのか、それについては、自然科学の分野の中で答えを探していただくべきもので、人文科学の分野でとやかく言えることではありません。まあ、とやかく言いたくても、その前に数字や計算式が並ぶだけでも脳ミソがフリーズしてしまう文系脳には、まるで理解不能なわけですが…。

天狗谷窯跡の発掘調査では、“科学的”にこだわるあまりに、熱残留磁気測定の結果に翻弄されてしまいました。ただ、これはまだ陶磁器編年もできあがっておらず、熱残留磁気測定の実績も乏しかった時代ですので、当時考え得る客観性の担保に最善を尽くした結果であり、いたしかたのないことだとは思いますが。

(村) R2. 7. 31

有田の陶磁史 (142)

前回まで、熱残留磁気測定について、少し詳しく触れたところでした。何しろ、これが昭和の通説を Teppan 化したご隠居の印籠(もう死語でしょうか?) みたいなものですから、その根拠の一部始終を一度突き詰めておかないと、次のステップに進めないからです。いわば、「天狗谷窯跡は、李参平ゆかりの日本

磁器発祥の窯であることを、科学的分析により証明する。」という鑑定書付きになったようなものです。でも、説明してきたことにより、ご納得まではいかなくとも、「もしかして、熱残留磁気測定アブナイ？」ってくらいは、感じていただけたのではないのでしょうか。そこで本来は残酷なことは好まないタチなので、これ以上はそっとしておきたいのはやまやまですが、これからが最後のダメ押しです。

この天狗谷窯跡の熱残留磁気測定に関する一連の記事では、まずは、いかにも科学的結果に基づくと見せかけて、実は科学とは無縁の解釈の積み重ねにより「李参平の窯」に傾いていったことをお話ししました。そして、次には、そもそもその科学的根拠の源泉たる熱残留磁気測定自体使えるのって話しを、前回までにしたところでした。

この熱残留磁気測定って使えるのって話しでは、本来は当時の方々にとって主役であるはずのA窯の測定結果には一顧だにせず、なぜかC窯の年代の是非についてしつこく潰しにかかったのはお気づきだったでしょうか。もちろんこれは自分で言うのも何ですが、深謀遠慮があつてのことです。まあ、そういうほど、深く考えていたわけではありませんが…。

思い出してみてください。まず熱残留磁気測定の結果から、4つの取り得る組み合わせが提示されて、最初は有効な組み合わせがなくなってしまったんです。そこでB窯で測定したはずがC窯の測定結果と読み替えるという、世にも不思議な Amazing Magic を使って、ようやく、1つの組み合わせを復活させたのです。つまり、A窯の年代の有効性を担保したのは、取りも直さず、C窯との年代的な組み合わせということです。よって、見てきたように、その永年変化曲線に基づくC窯の年代が100年から200年近くも誤差を生じているのですから、すでに有効な選択肢とは言いにくい状況なわけです。だって、B窯でもC窯でもいいですが、片方は現代ではとても受け入れがたい年代として提示されているわけですから、まさか、それでもA窯だけは正しいってのは、科学的じゃないでしょ。組み合わせ自体の有効性が崩壊しているわけですから。

もちろん、天狗谷窯跡における熱残留磁気測定の結果の否定により、1616年の磁器創始自体を比定しているわけではありません。実際に、今日の調査・研究でも、天狗谷窯跡ということではありませんが、おおむねその頃に磁器が創始されたことは判明しています。とりあえずは、この天狗谷窯跡における熱残留磁気測定による創業年代の確定が適切ではないことの再確認が、新しい天狗谷窯像や有田の歴史像を描くための出発点となるのです。

これに関連して、平成6（1994）年9月2日の毎日新聞に掲載された『戦後五十年』というシリーズの、「天狗谷古窯発掘」の記事をご紹介します。本日の話しを締めくくりたいと思います。そこでは、倉田芳郎氏のインタビューも交えて、以下のように記されていますが、当時の状況がヒシヒシと伝わってきます。

「（前略）中でもA窯は焼成室が十六室もあり、全長五十三メートル、平均幅三・五メートルと大規模で、最も古いE窯でさえ平均三・四メートル、同奥行き二・九メートルの焼成室が十一室も確認され、調査団を驚かせた。しかも、この草創期と見られた窯跡からは未熟な製品ではなく、完成度の高い磁器ばかりが出土した。調査団は結論としてE・A・Dを一六〇年代ごろの李三平の窯とし、B・C窯を後代の一八〇年代ごろの窯とした。今、倉田はこの結論について「A窯は大き過ぎて磁器が初めて焼かれた窯ではないと思いましたね。大量生産さえ思わせる窯でした。しかし、年代決定に熱残留磁気測定という科学的方法を用いたので、割り出した年代を信じたわけです。しかも、陶祖・李参平の窯跡と期待する有田町の思惑などもありましてね。調査団もその雰囲気飲まれた感じです。これが間違いでした。」と、苦笑しながら振り返る。現在、二グループの年代については前者は一六三〇～五〇年代、後者が一六五〇～八〇年代との見方が強く、倉田の見解もほぼ同様だ。」（村）R2. 8. 7

有田の陶磁史 (143)

いよいよ天狗谷窯跡発掘調査シリーズも、今回で終わりです。簡単に触れておくつもりが、1月からはじめて8月まで続きましたので、もはや半年超。磁器の創始シリーズがはじまって、陶磁史としての歴史的時間が1ミリも動かなくなってからは、まるまる2年です。珍しい陶磁史ですね。

さて、今回は、平成6（1994）年9月2日の毎日新聞に掲載された『戦後五十年』というシリーズの、倉田氏のインタビューも交えた「天狗谷古窯発掘」の記事で終わってました。倉田氏が語られた

「A窯は大き過ぎて磁器が初めて焼かれた窯ではないと思いましたね。大量生産さえ思わせる窯でした。しかし、年代決定に熱残留磁気測定という科学的方法を用いたので、割り出した年代を信じたわけです。しかも、陶祖・李参平の窯跡と期待する有田町の思惑などもありましてね。調査団もその雰囲気飲まれた感じです。これが間違いでした。」

というインタビューの部分がすべてを物語っているように思えます。科学と地元のプレッシャーですね。かくして、この調査によって、“李参平が1616年に天狗谷窯で磁器を創始した”という説は、科学的に証明された事実として、長らく日本の陶磁史上で語り続けられることになったのです。

さすがに今日では、天狗谷窯で磁器が創始されたという方はほとんどいなくなりましたが、「李参平が、1616年に、泉山で陶石を発見して、日本初の磁器を創始した」という部分は、旅行雑誌やパンフレット類などはともかく、学術論文などでもまだ生き残っていますね。特に、理系の方の分析系の論文にはよく見かけます。まあ、まだ辞典なんかにもそう書いてあるのでしかたないかもしれないですけどね。

ただ、考えてみたら分かりますが、この通説は、いわば一人の陶工の偉大な功績という内容です。でも、本当は、李参平の功績も、泉山の発見も、天狗谷窯跡の存在意義も、本質は別なところにあります。それは、すでにどこかで書いているかもしれませんが、有田が今日まで続く磁器の産地となりえた、産業化の基盤を築いたことです。よって、磁器創始窯ではなくなったとしても、天狗谷窯の価値が低下するわけではないのです。この問題については、長くなりますので、別の機会にお話ししてみたいと思います。

最後に、繰り返しますが、この操業年代の混乱がどうであれ、この天狗谷窯跡の発掘調査が、それまでの感覚的な鑑定レベルの研究から、考古学的手法に裏打ちされた学術レベルの研究へと舵を切る端緒となった重要な発掘であったことは間違いありません。逆に、半世紀以上も前に、これほどハイレベルな調査ができていたことに驚きすら感じます。基本の大切さですね。

それは、発掘調査報告書にも言えます。これまで、あちこちで引用してきましたが、その時々調査関係者の感じたことや、その時々選択肢、それによって取った行動などが逐一丁寧に記されており、調査の状況を追体験できるのです。読めば読むほど抜群のおもしろさは、まさに秀逸ものです。

もちろん、すでに50年近く前に刊行された本なので、学術的な内容の古さを感じる部分は多々あります。しかし、それを承知の上で、本来発掘調査報告書はこうあるべき、というお手本のような本であることは間違いありません。ぜひ興味のある方はご一読を。

ということで、全部終わり！！長かった…。（村）R2.8.14

有田の陶磁史 (144)

ということで…、前回までで、ようやく磁器の創始者にまつわる話しが終わりました。もう、もともといつどこから、こんな展開になったのかすら記憶のかなたにぶっ飛んでますが、あらためてこれまでの記事を遡ってたどってみると、どうやら平成 30 年 7 月 6 日付けが最初ようです。2 年ちょっと前ですね。ちなみに (46) ってたってますので、今回が (144) ってことは、通算 100 回近くも続いてたってことみたいです。

きっとこんなにしつこく磁器の創始者について記した研究史ってこれまでになかったはずですし、これからもたぶんないでしょうね。だいたい、華々しい何らかの発見がある可能性は皆無、だけど、おっそろしく手間ヒマだけはかかるって、実に非建設的な作業ですから、普通はやろうと思いませんから。研究史もちゃんと調べて咀嚼してまとめるとなると、結構な基礎知識がないとできないので、意外に難しいです。今回は、文体がコレですから引用とかは不可能でしょうが、原則、孫引きなんて姑息な手段は使わず、ちゃんと原典に当たってますので、内容自体は折り紙付きです。

先ほど、これからもたぶんちゃんと調べる人はいないだろうって書きましたが、実は、生産の考古学を研究領域にしていると、研究史を一度きちっと整理しておくのは悪いことではありません。たとえば、前回までお話ししていた、天狗谷窯跡についてもそうです。“1616 年に日本初の磁器を焼いた李参平の窯” っていう伝承に、結局、調査団が引きずられたことが誤りを招いてしまった大きな元凶でした。でも、お話ししたようにその伝承なるものは、調べてみると、昭和前期に完成する、何とその調査からはまだ半世紀もたたない前にはじまる伝承(?) だったわけです。こういうことも、知ってるのと知らないのでは大違いです。というか、自信を持って、それは本当の伝承なのか研究の過程で生み出された妄想からくる物語なのかを判別できるかどうかで、その後の論旨の組立が確実に違ってきますから。

ただ、この磁器と並行して陶器の方の研究史も調べてましたので、おかげで職場の机のまわり古書だらけで、いまだに乱雑にうず高く積み上がっています。何せバランスを崩すと瓦解してしまいますので、この一見無秩序な積み上げ方にも絶妙なコツが必要なんです。ちゃんとそのつど片付ければよいようなものですが、何かの研究をしている方ならご理解いただけると思いますが、一つの仕事が完結するまで片付けられないんですよ。そうすると、それが終わる前に次の原稿依頼が来たりして、片付ける間もなく、次の参考資料が積み重なるという悪循環。これって、何とかありませんかね～。

ということで、今回は雑談に終始してしまい、陶磁史に戻れませんでしたね。次回からは、何とか戻りたいと思いますのでご容赦ください。(村) R2. 8. 21

有田の陶磁史 (145)

さて…、陶磁史に戻らないといけないわけですが、いったいどこから再開でしたっけ？ きっと磁器の創始者の話を延々としてたくらいなので、1610 年代中頃に磁器というものが旧有田町の小溝上窯跡など西部地区の窯場ではじまり、その頃に金ヶ江三兵衛をはじめ、高原五郎七や家永正右衛門といった人たちが集まってきたってあたりではないでしょうか？ 以前の記事をあらためて読み直すのも面倒ですので重複するかもしれませんが、おさらいの意味でも、このあたりからはじめることにさせてください。ただ、この

あたりからは始めるには、窯業のはじまりの頃も関連しますので、結局、有田の窯業最初からみたいなものですが…。なるべく、説明が重ならないようにはします。

さて、陶器生産がはじまった頃の有田はどんな窯業地だったかと言えば、肥前の窯業地の中でも、縁辺に位置する小さな下級品生産のごく平凡なというか、いつ潰れるかも分からないようなさえない窯業地でした。今では想像も付きにくいですが、当時の人でさえも、とてもじゃないけど後に肥前の窯業の中心地になるとは思っていなかったでしょうね。

おそらく、最初は小溝上窯跡と天神森窯跡が開窯、それから小森窯跡も同じ頃かもしれません。そのわずかに後に、山辺田窯跡と原明窯跡、それから若干遅れて小物成窯跡が開窯したって感じでしょうか。つまり、磁器創始より以前には、窯場は最大に拡大した時点でも、6か所に過ぎないということです。ちなみに、これらの窯跡については、以前個別に説明したようなかすかな記憶がありますので、ここでは特に触れないことにします。

創始窯については、どう説明したんでしたっけ？『三河内焼窯元今村氏文書』（渡辺庫輔著 親和銀行長崎支店 1958）（以下『今村氏文書』と表記）については、触れたんでしたか？まあ、時々一部が引用されることのある文献ですが、この内容は生産史がある程度分かってないと読み解けない部分がありますので、ちょっとサービスして、ここでは通常よりもちょっと詳しくにお話ししとくことにしましょう。

この書籍の中には、文久2（1862）年の『折尾瀬村三河内今村甚三郎蔵書写』という古文書が所収されています。これは「今村氏先祖代々書伝同し文も有りしむかしのまゝに取集写し置」とあるように、今村氏伝来の文書を書き写したものです。その中の「今村氏代々申伝記之」には、元禄6（1693）年に肥前の古い窯場について調べた記録があり、それを天明8（1788）に記したものがあります。

ちとややこしいですね。要するに、古い窯場を調べたのが元禄6年で、それを記録した天明8年の文書が残っていたものを、あらためて、文久2年に書き写したものが現存しており、それを収めた書籍が昭和33年に刊行されたってことです。

って、今回はさわりの部分だけご紹介して、内容は長くなるので次回以降に譲りたいと思います。（村）
R2. 8. 28

有田の陶磁史（146）

前回は、『三河内焼窯元今村氏文書』という書籍に所収された、「今村氏代々申伝記之」という文書に、元禄6（1693）年に肥前の古い窯場について調査した記録があることをお話ししました。

この元禄6年当時の調査では、有田に関しては、以下のとおり、二つの窯場が記されています。

「一 南河原皿山 彌右衛門と申者取立」

「一 小溝皿山 三兵衛取立是八南川原同前二出来」

小溝皿山の記載に「南川原同前二出来」とあることから、この文献史料では南河原皿山と小溝皿山は、ほぼ同じ頃に成立したということになります。

また、同じ文久2（1862）の『折尾瀬村三河内今村甚三郎蔵書写』には、「国々焼物皿山元祖並年数其外高麗ヨリ来ル人書出今村如猿記之」という文書もあり、同じく各地の皿山の成立に関わる窯場などが記されており、やはり有田に関しては以下のように2窯場が記されています。

「有田南川原山頭彌右衛門其子太郎右衛門」

「小溝山頭三兵衛 右こみそ山南川原同前二出来」

この二つの史料の内容はほぼ同じだということは分かりますが、こちらの方には今村如猿による調査であることは記されますが、その調査年について触れていません。ですが、同書によるとこれを記した今村如猿は、三川内焼の始祖の一人とされる朝鮮人陶工巨関の子である今村三之丞の子とされています。つまり、巨関の孫ってということですが、同書によれば、享保2（1717）死去とされています。

つまり、ごく素直に考えれば、最初の方の史料の文禄6（1693）年の調査とは、時期的に見て、今村如猿によるものである可能性が高く、両文書とも同じ調査に基づく記述だと考えて良さそうです。内容が同じで当然だということです。

ただ、両史料には、よく見ると、ちょっとした違いも見られます。前者では、「取立」の名称が使われて、後者では「頭（かしら）」となっていますが、要するに、どちらも窯場のリーダーということだと思えます。また、前者では窯場の名称は「皿山」、後者では「山」となっていますが、これについてお話しする前に、これらの史料の理解を深めるためと、今後も触れるであろうこの付近の地理的混乱を招かなくするために、まずは、地名の話しをしておく必要があります。

ただ、長くなってしまいますので、次回説明することにします。（村）R2.9.4



有田の陶磁史 (147)

前回は、南川原などの地名の話をしماすってところで終わってましたので、本当にします。まあ、有田出身でもないヨソ者が、エラソーに説明するのもどうかと思いますが、たぶん生まれも育ちも有田の方でも、むしろ知らない人の方が多いかと思ひますし、あまりにマイナーな話しで、どこの文献にも記されてないと思ひますので、この場をお借りしてご説明させていただくことにします。

前回提示した『三河内焼窯元今村氏文書』所収の文久2（1862）年の『折尾瀬村三河内今村甚三郎蔵書写』という文書には、「今村氏代々申伝記之」と「国々焼物皿山元祖並年数其外高麗ヨリ来ル人書出今村如猿記之」という文書があり、有田の窯場のはじまりとしてほぼ同じ内容が記載されておひました。その両資料には、「南河原」ないしは「南川原」という地名が記されておひますが、前の方の史料では両方が並記されますので、少なくとも、この史料の書かれた文久2（1862）年時点では、両方の表記が併存しておひたことが分かります。というよりも、天明8（1788）に記したものを文久2年に転記しておひるわけですから、正確に写しておひれば、天明8年時点ですってことになり、もともと元禄6（1693）に調査したものを書き写しておひるわけですから、元禄6年時点ですすでに両方の表記があつたのかもしれないうて解釈することもできます。って、グダグダ書きましたか、後に説明するよように、本当は、もっと前から両方の表記方法が混在しておひます。

ところで、漢字の表記法は別として、この“なんがわら”の名称は、ご承知のとおり、現在でも有田の中では日常的に使われておひます。ですので、たとえば観光客の方が、有田の人に“なんがわら”への道順を尋ねると、すぐに答えが返ってくるはずです。そのくらい、地元ではなじみ深い地名です。

ところが、天神森窯跡の位置する場所にあるお宮さんは「南川良天満宮」であり、ちょっと漢字が違つておひます。ただ、今のところ、この表記方法については、調べたことがないので詳しい来歴を知りません。ただし、有田人なまりで“なんがわら”は“なんごら”と発音したりもしますので、そこで“良”という文字が宛てられた可能性はあります。ただ、江戸時代までの文献では、これまで見た記憶はありません。さらに、柿右衛門入り口の歩道橋には「南川良原」の名称が付けられておひる、同じよような場所なのに、「南河原」「南川原」「南川良」「南川良原」とおひるんな表記方法が混在しておひることになります。ところが…、意外かもしれませんが、現在地図のどこを探しても、どこにもそんな地名はでてきません。同じとおぼしき場所には、「南原」や「南山」あるいは「南山」を二分割した「上南山」「下南山」とおひる表記だけが見えます。

もう、この時点で、大半の有田人ですら、日常的に使つておひるはずなのに、知識がアヤシくなつてきたはずです。

現在の有田町内の行政区のうち、8区として区分されておひる地域が、「南原」と「南山」を合わせた範囲にあたります。実は、これらの名称は江戸時代までの文献には出て来ない新しい名称で、「南原」は「南川良原」の、「南山」は「南川良山」の略称です。簡単に言えば、以前は「南川原」が“原”と“山”に分かれておひたということですよ。

これから、もっと難しくなつてきますので、頭を整理する意味でも、ちようどいい長さとなりましたので、今回はここまですにとします。（村）R2.9.1

前回は、現在の「南原」「南山」地域の地名の話しをしてました。続きです。

漢字の表記方法はムシしますが、前回の話では「南原」は「南川良原」の、「南山」は「南川良山」の略称で、もともと「南川原」は、“原”と“山”に分かれていたところまででした。

実は、これは有田特有の地名の発祥形態で、ほかにもいくつか類似した例があります。一つが“ほかお”という場所で、現在では「外尾町」と「外尾山」に分かれていますが、もともとは「外尾村」から「外尾山」が分離されたものです。同様に現在は「広瀬」と「広瀬山」は別々の地区ですが、元は「広瀬村」から「広瀬山」が分離したものです。

これらの地名には窯業が深く関わっており、有田でいう“山”とは窯場のあった場所を指し、自然地形の山のことではありません。

という説明をすると、他には“山”の付く地区名は、たぶん泉山くらいしかありませんので、「有田のかつての窯場は泉山と外尾山や広瀬山、それと南川原山くらいしかなかったんかい！」って突っ込みが入りそうです。おっしゃること、ごもっとも！！今回は南川原の話ですが、このままほかの地区の話をせずに終わるとウソつき呼ばわりされそうですので、脱線しますが、簡単に説明しておきます。

話が出たついでに最初に泉山ですが、これはちょっとイレギュラーです。泉山とは文字どおり、磁石場のある自然地形の山のことです。それを象徴的に地区名としているわけです。余談ですが、泉山はもともと泉山という地名だったわけではありません。泉山が磁器原料の産地としてバリバリメジャーになる前の17世紀中頃までは、実は、“年木山”と呼ばれていました。“年取った木のある窯場”、そう、おそらく今では国指定天然記念物となっている大イチョウのことでしょうね。地元の方ならご存じのとおり、そのすぐそばの場所は、今でも“年木谷”という地名として残っています。まあ、泉山磁石場が発見される以前は、このあたりは人も住まない山奥だったわけですから、ひときわバカでかい大木が目印になったであろうことは想像に難くありません。17世紀中頃には窯場としての年木山は一度途絶えてしまいましたが、17世紀の終わり頃に再び復活しました。この時に、年木山ではなく、泉山という地区名に代わったわけです。主役の交代ですね。

ただ、この場合、本来窯場としての泉山を表す場合は、“泉山山”とするのがルール上は正解でしょうね。でも、まあ、それではさすがに変な地名になってしまいますので、便宜上、自然地形と窯場を意味する山をひっくるめて、泉山となっているわけです。

では、その他の地区名はどうでしょうか？たとえば、窯場のなかったところは“町”や“村”の付く地名でした。ただ、今は村という地名は“広瀬村”や“曲川村”をはじめ、省略されて残っていません。町の方も省略するのが正統派で、“中の原町”は今では“町”を省略するのが一般的です。ただ、これにも例外があります。“赤絵町”です。泉山とは逆に省略すると、“赤絵”になってしまい、地区名だかやきものの種類名だか、混乱すること必死です。

実は、窯場のあったところでも、この省略というのがミソです。たとえば、大樽だとか黒牟田だとか、こういったところは、もともと“大樽山”であり、“黒牟田山（正確には黒仁田山）”でした。しかし、こうした地区は、外尾村や広瀬村と違って、地区全部が窯場となりました。だから、あえて“山”を残さなくても、地区名を表すのに支障がなかったわけです。

ずいぶん余談が過ぎてしまいました。南川原の話に戻ります。

江戸時代前期、正保（1644～1648）の『肥前一国絵図』には「南川原村」の名前が見えますが、これは窯業地も含めた南川原地区全体の名称として記された可能性もあるものの、ちょうどこの頃は、この地域で

窯業が一度途絶えて再び復活する頃に当たり、農村としての位置付けが定着していた頃と言えかると思います。

先ほど見た例のように、その後、「南川原村」から再び復活して盛況を取り戻した窯業地が分離され、承応2（1653）年の『萬御小物成方算用帳』時点では、「南河原山」と「南川原皿屋」の地名が見られるようになります。その分割されず残った場所が「南川良原」というわけです。ちなみに、この二つの窯業地の地名は、後にはそれぞれ「下南川原山」「上南川原山」に改称されています。つまり、「下南川原山」が現在の「下南山」地区のことであり、同様に「上南川原山」が「上南山」ということです。

ところで、もともと地名の説明に至った発端の『今村氏文書』所収の二つの古文書では、「南河原皿山」とか「南川原山」という名称が使用されています。そうすると、先ほどの説明どおり解釈すると、これが「南山」地区の窯業のはじまりのことだと、良心的な方は受け取られると思います。ところが、おっとどっこい、そう甘くないところが、歴史の難しさでもあり、おもしろいところです。

先ほど、復活して盛況を取り戻し、「南川原村」から上下の「南川原山」が分離されて後に「南山」となり、残ったところが“原”の部分で後の「南原」だと説明しましたが、実は、窯業が復活する前のもともとの「南河原皿山」や「南川原山」は、後の「南山」地区にはありませんでした。

ムシしてきましたが、『今村氏文書』には「南川原」とともに「小溝」という窯場も登場していました。この「小溝」の位置する場所は、「南原」地区で、何を隠そう、もともとの「南川原山」「南河原皿山」もこの「南原」地区に位置していたのです。

いいところですが、まだまだ話は続きそうですので、このあたりで一度仕切り直して、続きはまた次回説明することにします。（村）R2. 9. 18



図中の「小溝上窯跡」から「天神森窯跡」のあたりが「南原」地区。「天神森窯跡」の南（下方）に延びる谷筋が「南山」地区。

有田の陶磁史 (149)

前回は、南川原の窯業地は南川原山のはずなのに、なぜか『今村氏文書』に記された有田最初の窯業地であるはずの「南河原皿山」「南川原山」は、「小溝皿山」や「小溝山」同様に、「南原」地区に位置しているという話しでした。続きです。

仮に『今村氏文書』の記述が正しいとして、有田に最初にできた窯場は「南河原皿山」や「小溝皿山」だったとします。そうすると、それに該当する窯場は、「小溝皿山」の場合は、現在、小溝上窯跡と称されている窯場以外にありません。ちょうどセブンイレブン三代橋店や家永歯科医院の裏山（北側）に当たります。

一方、「南河原皿山」には、該当する可能性のある磁器創始以前に成立する窯場としては、天神森窯跡と小物成窯跡がありますが、この二つを比べた場合、陶器の組成の点などから、該当するのは天神森窯跡だと考えて間違いありません。しかし、この天神森窯跡にしても小物成窯跡にしても、柿右衛門入り口から入ってすぐのところの位置していることは、有田の地理をご存じの方でしたら一目瞭然です。柿右衛門入り口の角のガソリンスタンドの裏山が小物成窯跡、そこから波佐見方面へと通じる道を挟んで反対側（西側）の丘陵上の南川良天満宮のあたりが天神森窯跡です。

この南川原地区の窯業は、一度 1630 年代の後半頃に廃止され、1640 年代頃に再び復活しています。復活後最初の下南山の窯場は、現在は南川原窯ノ辻窯跡と呼ばれており、そのほかに平床窯跡や柿右衛門窯跡などがあります。また、上南山の窯場としては樋口窯跡が最初で、源左衛門窯跡と称されている窯場も似たような時期かと思われませんが、そのほかにムクロ谷窯跡という窯場などもあります。

窯場の位置関係をご確認いただければ一目瞭然ですが、1630 年代の窯業廃止以前の窯場は、「南原」と「南山」の境目にあたりに位置しており、復活後の窯場はそれより南の「南山」地区に集中していることが分かります。

だから何ってことですが、以前、有田の“山”とは自然地形の山のことではなく、窯場のことだという説明したと思いますが、それを思い出してください。この“山”という概念は、窯場のことですので、登り窯の築かれた丘陵に加えて、工房のあった、その丘陵に面した平地を合わせたものです。つまり、家屋の建ち並ぶ平地とそれに面する丘陵斜面が一つの“山”ということになりますので、自然地形の山の反対斜面は、また別の山ということになるわけです。ですから、登り窯の位置する丘陵がどの平地と一体化した生産の場となっているのかということが分かれば、その窯場の範囲が分かることになります。

そうすると、復活後の窯場は国道 35 線と接する北端の柿右衛門入り口から南側の波佐見町へと抜ける町道南原線・南山線に沿った谷筋の平地に形成されており、現在の南山地区の町並みと合致していることが分かります。一方、窯業成立期の窯場と一体化した平地の方は、天神森窯跡の北側の MR 三代橋駅側であり、その平地に対峙した北側丘陵斜面に小溝窯跡が築かれているという位置関係にあるわけです。つまり、天神森窯跡と小溝上窯跡は、丘陵斜面に接する平地は一続きですが、有田の窯業地の平地としては広めなので、二つに分かれているのです。

したがって、まとめてみると、南川原地区の窯場は、もともと「南原」地区に形成されましたが、それが 1630 年代後半に廃止された後、1640 年代に復活した後には、「南山」地区に移ったということです。もともと何の話しをしていたか忘れてしまいましたが、とりあえず、そういうことです。

ちなみに前にも触れましたが、「南川原」と「南河原」という表記方法は、すでに江戸前期の 17 世紀中頃には並記されており、どちらがもともとの表記方法だったのかは分かりませんが、現在では「南川原」と記す場合が多いようです。これはもしかしたら、近隣の「三河内」や「大河内山」が、今では「三川内」

や「大川内山」に変わっているのに関連するかもしれません。ただ、いずれにしても、今は「南原」や「南山」であり、「南川良原」や「南川良山」という行政上の正式名称はないわけですが。（村）R2.9.25

有田の陶磁史（150）

前回まで、「南川原」とかの地名の説明に気合いを入れてしまい、話しが随分脱線してました。もともと、『三河内焼窯元今村氏文書』所収の文久2（1862）年の『折尾瀬村三河内今村甚三郎蔵書写』という文書には、「今村氏代々申伝記之」と「国々焼物皿山元祖並年数其外高麗ヨリ来ル人書出今村如猿記之」という記述があり、それぞれ本来は、今村如猿が元禄6（1693）年時点で調べた記録だろうという話しをしていました。こんな小難しいなじみのない文章など、たぶんお忘れだと思いますので、もう一度、それぞれ記しておきます。

「一 南河原皿山 彌右衛門と申者取立」

「一 小溝皿山 三兵衛取立是八南川原同前二出来」

「有田南川原山頭彌右衛門其子太郎右衛門」

「小溝山頭三兵衛 右こみそ山南川原同前二出来」

というように、両方の文書とも、中身はほぼ同じです。有田の窯業地としては、最初に南川原と小溝がほぼ同じ頃にできたという内容です。

ところが、よくよく見ると、両文書にはちょっと記述方法の違いが見られます。前者では“皿山”ってなっていますが、後者では“山”という表現が使われています。こんなささいなことなど、どうでもよさそうな気もすると思いますが、そこをほっとけないのが、一種の職業病でしょうか。

でも、実はこの両方の表現とも、針の穴をつつくようなイチャモンに近い話しではありますが、正しくありません。まあ、正しくないというのも、正確には正しくないんではあるんですが…。あくまでも、禅問答ではありません。歴史の話しです。

というのは、この調査は記したように元禄6（1693）年に実施したもので、それを天明8（1788）に書いたものが残っていて、それを文久2（1862）年に書き写したという頭の体操みたいな代物です。では、この調査が実施された元禄6年の段階では、窯場はどのように表現するのが正しいかと言えば、“山”です。ですから、後者の文書の書き方が正しいわけです。しかし、内容的には有田で窯業がはじまった頃、つまり、1600年代頃のことを記しているわけですが、この頃の表記方法としては“山”ではなく、“皿屋”という表現が適切です。この“皿屋”は17世紀後半の中で、“皿山”という表記方法に変わっていきますので、調査した元禄の時点では、前者の史料のように“皿山”と記すのも間違いではないわけです。

もう、おそらく、「こいつ何を言ってるんやら？頭大丈夫かい！！」ってお叱りのご意見もあるかと思えます。“山”も“皿山”も間違いだと言ったかと思えば、返す刀で、でも“山”も“皿山”も、あながち間違いではない…。言ってることの意味がまったく意味不明というのが、まっとうな脳ミソの方のご意見

かだと思います。ですから、今回はその真意をご説明することにします。別に古文書の専門家ではありませんが、歴史を研究する上では、これくらいは読み込む必要があるって話しです。（村）R2. 10

有田の陶磁史（151）

今回は、古文書中にある、南川原の“皿山”や“山”という表現が正しいのか正しくないのか、意味不明な状態で終わっていましたが、さて、どういう展開になるのでしょうか？

これを説明する前に、そもそも“皿山”と“山”の違いについて、お話ししておく必要があります。一字違いですが、まるで違うものです。

“皿山”とは、やきものの窯場全体のことで、前回もお話ししましたが、もともとは“皿屋”という名称で、17世紀後半の中で“皿山”に改称されます。これは窯業がはじまった時からある区分です。一方、“山”は、もしこのブログが運良く続いていれば後に詳しく説明することもあるかと思いますが、寛永14（1637）年の「窯場の整理・統合」の際に誕生する窯場の区分です。

この時、何が起こったか？実は、この事件の際に、それまではそれぞれが独立した“皿屋”（つまり産地とえばいいでしょうか）であった窯場を「有田皿屋」として統合し、それぞれの窯場は“山”という名前に改称して、「有田皿屋」を構成する窯場の一つとして位置付けたのです。

ちと、説明がややこしいですね。もっと平たく説明します。寛永14年以前には、それぞれ独立した「●●皿屋」という産地が、有田の中にいくつも点在していました。しかし、寛永14年にそれらをひとまとめにして、「有田皿屋」という名称のもとに、一つの産地として括ったということです。そうすると、それまで“皿屋”という名称であったそれぞれの窯場には、別途名称が必要となってきます。それが“山”というわけです。まあ、今風に言えば、「有田皿屋」という持ち株会の下に「●●山」という子会社が、いくつもぶら下がっているみたいな感じをイメージしていただければ、当たらずしも遠からずってところでしょうか。この「有田皿屋」ホールディングスの実務を担っていたのが、「皿屋代官所」であり、その社長さんが「皿屋代官」ってことです。

話を戻します。

たとえば、承応2（1653）年の『萬御小物成方算用帳』には、南川原地区の窯場として、「有田皿屋」に含まれる「南河原山」と含まれない「南川原皿屋」が併記されています。つまり、これは「有田皿屋」の一角を占める「南河原山」とは別に、当時は「南川原皿屋」という独立した窯業地が南川原地区に存在していたことを意味しています。こうした、「有田皿屋」に含まれない当時の独立した皿屋の例としては、ほかに「広瀬皿屋」などもあります。

ここで詳しく説明すると、また脱線して戻ってこれなくなる可能性大ですので、詳しくはお話しませんが、新しく組織された「有田皿屋」には、磁器専業や泉山の原料を使うなど、グループ会社特有の統一的なルールが設けられていました。しかし、それらの独立した「皿屋」では、その当時の段階では陶器生産も行うなど、まだ「有田皿屋」を構成する“山”の参加条件を満たしていなかったのです。しかし、その後「有田皿山」に組み込まれて、「上南川原山」や「広瀬山」となります。

という解説をした上で話を整理すると、『今村氏文書』の元禄6年の調査時点でのルールに基づく窯場の呼び方としては、「南川原山」や「小溝山」と呼ぶ方が正しいこととなります。当時は、すでにどこの窯

場も、「有田皿山」を構成する“山”になっていたわけですから。しかし、文書の内容的には、窯業成立時点の“皿屋”を調査したものですので、まだ「有田皿屋」自体の形成以前の話しです。ですから、その歴史背景を考慮すれば、“皿屋”ではなく“皿山”という後世の表記が用いられてはいるものの、「南川原皿山」「小溝皿山」という表現の方が、意味合的には、より適切だということです。当時は「南川原皿山」と「小溝皿山」は完全なる別会社だったということですね。この点は重要です。

だいぶスッキリ!!されたでしょうか?しつこいですが、そうすると、もう一つ問題が残されていることに気付くわけですが、長くなりますので、次回ということにします。しかし、古文書の一部の短い記述だけなのに、ずいぶん引っ張りますね…。(村) R2. 10. 9

有田の陶磁史 (152)

前回までに、ほとんど『今村氏文書』の内容は片が付いたところでした。ただ、もう一つ問題が残されているとお話ししました。前回の復習っぽい内容にはなってしまっていますが、本日はその問題点の整理です。

というのは、提示した片方の文書のタイトルである「国々焼物皿山元祖並年数其外高麗ヨリ来ル人書出今村如猿記之」でも分かるように、示した古文書の内容は、それぞれの生産地の源流となる窯場について記したものです。つまり、この内容からも、有田の窯業のはじまりは、今の南原地区にあることが窺えるわけです。きっと以前触れたと思いますが、考古学的にも起源としては同じ結論が導きだされますので、史料とモノが合致するわけですから、より信憑性としては高まるわけです。

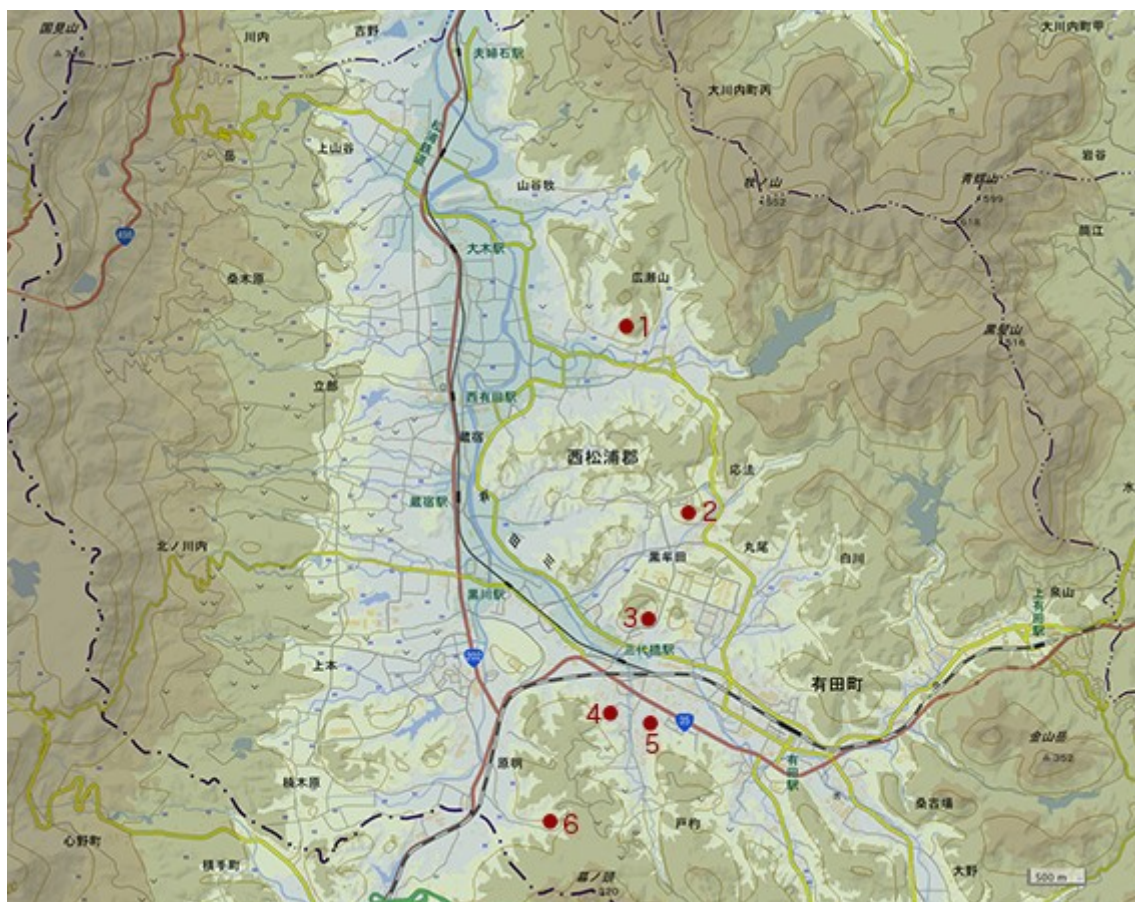
でも、南原地区で窯業がはじまったことが分かるにしても、ここで一つの疑問がわきます。なぜ、肥前地域のそれぞれの地区の元となった窯場について記しているはずなのに、有田の、しかも同じ南原地区の窯場なのに、南川原と小溝という二つの窯場がチョイスされているのでしょうか?本来ならば、一つのはずです。あらためて考えてみると、不思議だと思いませんか?ほぼ同時に開窯していることが関係しているのでしょうか??そういう解釈もできないことはありませんが、別の解釈の方が良さそうです。実は、すでに答えは示してありますので、ちょっと考えてみてください。

結論からお話しすれば、前回触れたように、南川原や小溝に窯場が築かれた当時は、まだ「有田皿屋」という概念は確立していません。つまり、それぞれが独立した「皿屋」だったということです。というよりも、それぞれが、独立した生産地だったという方が分かりやすいかもしれませんね。まだ、有田というまとまりのある生産地は、存在していなかったのです。ですから、ほぼ同時にできたものの別の生産地として、南川原と小溝が提示されていると考えた方が窯業史上は合理的に解釈することができます。

こうした状況下では、もちろん有田の窯場として、まだ佐賀藩など公的な組織が窯業のイニシアチブを取るような段階にはありません。したがって、天神森窯跡も小溝上窯跡も最初期の段階では、生産される陶器のスタイルや技法に意図的な歩み寄りは見られません。しかし、ほどなく有田的な生産スタイルの色が出はじめますので、民間レベルの交流の中から、売れ筋の商品が選別され、しだいに有田地域の窯場では似たような製品、いわば有田風が作られるようにはなったのではないかと思います。

ただし、例外もあります。広瀬地区にある小森窯跡です。この窯場に関わっていた方々はよっぽど偏屈だったのか…、もとい、伝統を重んじる方々だったのか、有田の他の窯場とは器形や技法の異なる種類の製品を頑固に作り続けました。でも、途中でマズイと思ったのかどうかは知りませんが、やや方向転換も模索されるのですが、結局、有田風へと完全に方向転換の舵を切る前に力尽きてしまいました。そのため、この窯場は、磁器創始以前に開窯が遡る窯ですが、唯一、磁器生産窯へと転換することができず、後継窯もないままに単発に終わっています。

つまり、天神森窯跡や小溝上窯跡などを中核とし、南原地区を中心として、有田の窯業が展開されることになったのです。(村) R2. 10. 16



有田の磁器創始以前に成立した窯場

有田の陶磁史 (153)

磁器の創始のあたりから陶磁史を再開するつもりでしたが、『今村氏文書』の内容から、窯業のはじまりのあたりの説明に戻ってしまっているようです。本当は、『今村氏文書』の記述から別の点に注目するつもりで取り上げたんですが、まあ、それについてはおいおい触れることにして、あまり以前とは重ならない話をするつもりですので、かぶったらゴメンナサイです。

ところで、本日も思い付きですが、たぶん以前お話してないような気がしますので、ここで触れさせていただくかと思うしだいです。

有田で窯業がはじまって、磁器が創始されるよりも前には、最大で6か所の窯場開かれたという話をしたと思います。

今回も、それを記した図を添付していますが、何か特徴に気付きませんか？

有田は西側の国見山系と東側の黒髪山系に挟まれて、やや広めの平地が南の佐世保市方面から北の伊万里市方面へと伸びています。その黒髪山系の縁辺部、伊万里市寄りの丘陵上には鎌倉時代前期までに唐船城が築かれ、そこを中心にこの平地で農業を主体とする生活圏が形成されていたのです。

ところが、1600年代頃に、おそらくは伊万里市方面から移り住んだ人々によって窯業がはじまります。こうした人たちの多くは、窯場で用いられている技術から推察して、朝鮮半島出身者であった可能性が高いと思います。

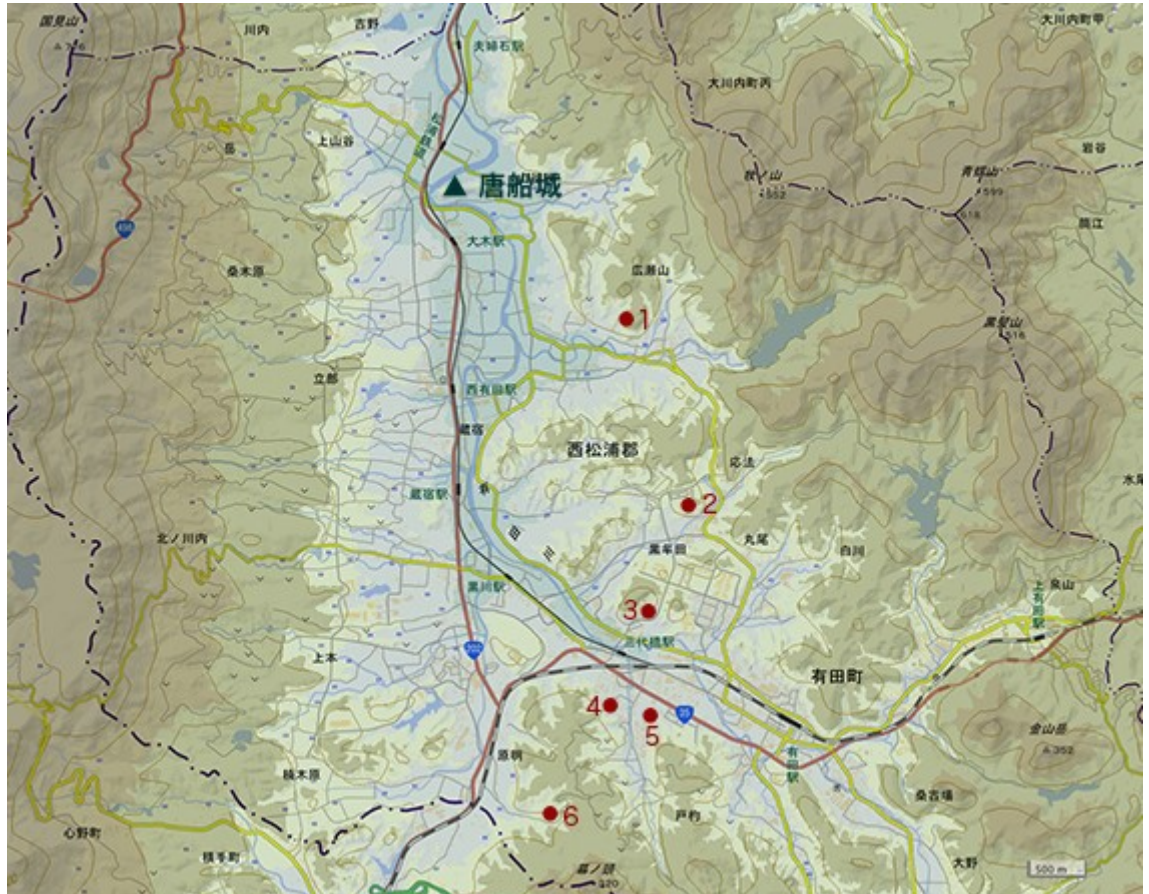
では、その窯場はどこに築かれたか？

まず、挿図を見ていただけると一目瞭然ですが、国見山系側には皆無で、すべて黒髪山系側の丘陵に位置しています。また、黒髪山系側でも中央の平地に直接面した場所にはなく、いずれもその平地からやや東に奥まった小さな平地に面したところに位置することが共通点です。

ここから、ということが推測されるでしょうか？

おそらくは農業を主体とする生活圏域からは外れた場所で、なおかつ、農業も営める立地ということ。地形が入り組んで小さな平地の多い黒髪山系側と比べ、国見山系側は比較的すそ野が直線的で、ほぼ中央の平地に面しています。その上、この国見山系側は、旧石器時代から縄文時代の洞穴遺跡が発見されているように、平地の部分と同様に古くから人々の生活が営まれている場所で、現在でも丘陵斜面には棚田など築かれ農耕地として利用されています。古くから農業を主体とする生活圏域として組み込まれている場所なのです。

つまり、窯業の成立期には、おそらくはそうした既存の日本人の生活圏域とは重ならない場所が窯業を行う場所として選ばれ、周囲の丘陵に登り窯を築いて、半陶半農の生活が営まれたであろうということが窺えるのです。（村）R2. 10. 23



有田の磁器創始以前に成立した窯場

1. 小森窯跡 2. 山辺田窯跡 3. 小溝上窯跡 4. 天神森窯跡 5. 小物成窯跡 6. 原明窯跡